

198

特230

968

人間理學講話 第一分冊

序 疑 信  
文 篇 篇  
惑 感 念

第一章	青年の悩み
第二章	生存と苦悶
第三章	死命の観
第四章	生命の犠牲
第五章	安心立命
第六章	肉體の生命力
第七章	生理の調節作用
第八章	心理の精神作用
第九章	眞の一元唯物論



始



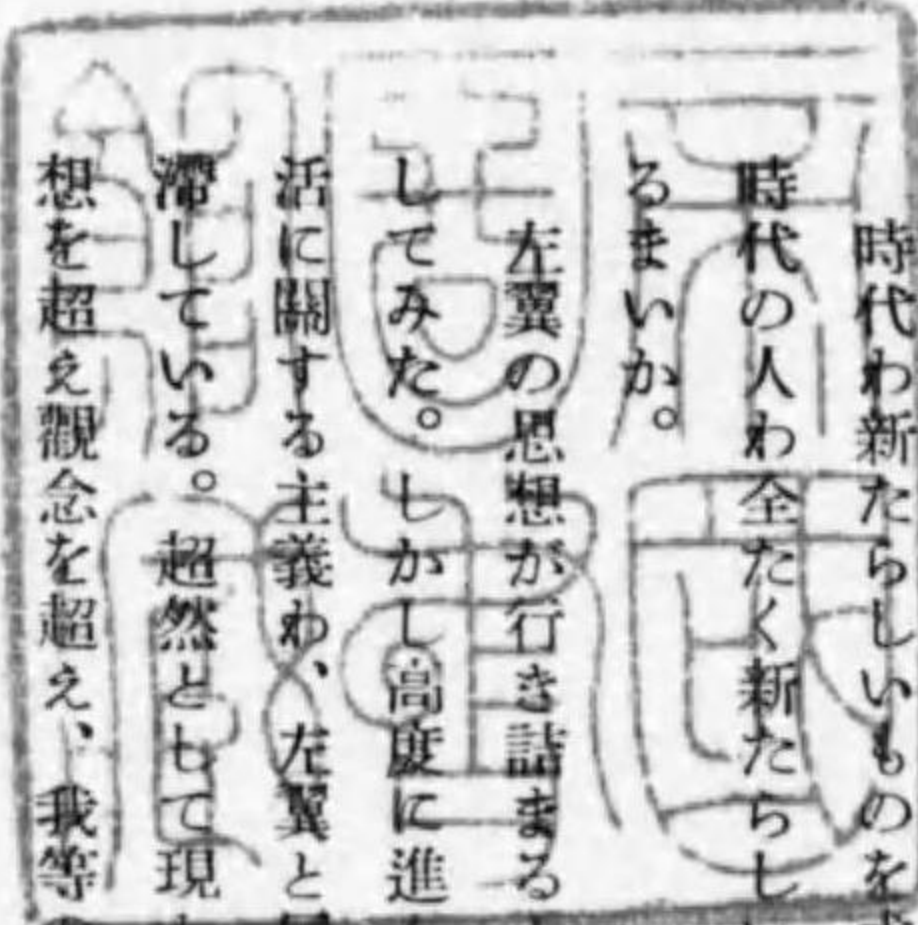
特230  
968

# 序

時代が新らしいものを求めている。今までの思想で解決できない悩みが、深く時代を閉ち籠めて、げにも時代の人が全たく新らしいものを求めている。非常時とか行き詰まりとかの言葉も、斯おした悩みの反映であるまいか。

左翼の思想が行き詰まると、古るいものを蒸し返えしてみた。社会生活でわ自治や自給自足の観念を蒸し返えしてみた。しかし高度に進んだ分業と交換の文化世界が、そんなにも古るい所ろえ返えせるものでなく、社会生活に關する主義ゆ、左翼と同時に右翼も行き詰まり、悩みを越えて茫然と自失し、眞に非常時の空氣が力なく沈滞している。超然として現われたものが、眞理と最善を強く指示する我等の經濟生活理學である。主義を超え思想を超え観念を超え、我等の經濟生活理學を臆せず、眞理よ最善よと提言する。昭和四年十月平凡社より出版された『規範經濟學』を超然たる我等の提言であり、その普及版わ『經濟學確認』と題し、原理篇と實生活篇に分けて純眞社より再出版された。また私わ眞理と最善の立場より、『マルクス資本論嚴正批判』をも出版し、左翼理論の總誤謬を忌憚なく暴露した。

眞理と最善を指示する我等の經濟生活理學わ、餘まりにも大きな理論の根本訂正である。私わ純眞學園にて絶えず講述し、また時き時き公開の講演會場にて幾千人に説示した。眞理と最善わ常に承認され、いまだ一人の反



駁者も出て来ない。

社會生活よりも深いものが人生に關する疑惑である。左翼や右翼の唯物論が希望の焦點を離れると、佛教を主とした古るい唯心論が蒸し返えされた。けれども此の蒸し返えしわ真じ目な研究でなく、ほんの軽い處世道德を探がす程度である。もし真じ目に研究すれば、唯心論わ水に浮く月影よりも淡い、錯誤の妄念であるを發見しよう。

古るい觀念にわ缺陷があるから、新たらしい思想が生まれたのである。その新たらしい思想にも缺陷がある。それゆえ時代わ行き詰まり、時代の人わ悩んでいる。それだのに再び古るい觀念を蒸し返えすとわ、げにも狼狽の逆か立ちでないか。慌てず落ち付き、凡べてを凡べて、全たく新たらしく確認し直おそおぞ。我等の經濟生活學わ人類社會生活の斷乎たる確認改新である。さらに一層深く人生の最根本を確認改新し、我れ等わ人間學を提唱した。

高慢でなく敢えて我等と言う。既に多くの人が完全に受け入れた。だから私と言わす我れ等と言う。人生に關する我れ等の提唱わ、大正十四年十月二十日『美教準備』の第一分冊を發行した日に始まる。美教準備わ六分冊となり、翌年八月二十五日に完結された。それわ自然科学を無視せぬけれども、自然科学を基礎とするに至らず、宗教と科學の交叉に成る程度のものであつた。自然科学の上えに鞏固な基礎を確立しよとおと幾年かの努力を集中し、昭和六年三月『人生問題總解決』となつて純眞社より發表された。『人間學』と改稱したのわ、その第三版からである。

人間學と生活學の骨子わ九分冊としてエスベラント語に翻譯され、世界の有志え分けられている。熱心な感激の手紙が續々と私の手元に來る。世界の總誤謬を克服し、全人類の諸民族を正しく指導して、時代の行き詰

まりを輝やかしい光榮の完成にまで轉廻さすものわ、必らず我等の思想體系である。我等の思想體系わ“Vera Vivo Spirita kaj Matera”となつて、その概要が一冊に取り纏められてもいる。

人間學の原書わ簡易に過ぎて難解であり、平易に解説して欲しいと絶えず要望されていた。人間學わ自然科学を總綜合しての嚴重な歸結と確認であるから、詳わしく根據を指示して判明に説述する必要がある。本書わ永久生命篇までの各章に於て此の任務を盡くし、自然科学を總綜合して人間實質と人間性を明確ならしめよとする。けれども其れだけでわいけない。明確となつた人間實質と人間性から、實生活を決定する諸法則を發見せねばならぬ。自己完成篇より以下の各章に於て本書わ全たく新らしく、時代と時代人を規律する倫理と道德と制度と組織を探究する。

私が道德と言う中かにわ、自己に對するものも含まれてる。他人に對して正しい道德を守ると同時に、自己に對しても正しい道德を守らねばならぬ。自己に對して正しい者が、始めて他人に對しても正しくなり得る。左翼や右翼の唯物論爭主義者だち、他人と社會に向かい要望する前に、先づ自己を正しくしよおぞ。

自己を正しくする道德わ修養と鍛錬であり、人間學わ永久生命の人間實質完成にまで、自己に對する道德を高かく進める。之に依つて他人に對する道德も人類完成にまで高かく進む。

道德として探究すれば、生活學と關聯して幾多の問題が答えられ、社會完成篇と使命篇が展開した。それわ過去と現在の正しい道德を悉ごとく再確認し、かつ新らしいものを必要ある限り追加した。人間學わ生活學と伴ない、人生と社會に關する有らゆる疑惑と苦悶を總解決したのである。斯く言うわ誇張であるまいか。いや私わ鋭敏な青年だちを幾年も教え續けている。徹底して何んの疑問も残らないまでに、追究し追究して私わ鋭敏な青年だちを教え續けている。げにも我等の思想體系わ有らゆる疑惑と苦悶を總解決したのである。もし本

書を読んで何にらかの疑惑が残るならば、幸わいに報知されたい。

人間理學が生活理學を綜合するに及び、全生活が唯一の思想に纏まつた。分裂して人間理學でも生活理學でもない、全生活の教學に纏まつたのである。斯く纏まつたものが宗教篇に爛熟し、更らに爛漫の花を超越篇に咲かす。超越篇が人生の終局を藝術と知らし、歡喜の光榮が遂に人間理學の絶頂に結實したのである。

超越篇が大宇宙の永久生命を藝術の大歡喜と知らす。此の歡喜が大きい。もし大きな歡喜の超越篇で本書を終結すれば、苦悶に行き詰まる現代人わ、餘りにも著じるしい理想と現實の隔たりに茫然となるお。之を恐れて最後に努力篇を添え、地上の肉體人生を超越者となる準備の道程であるから、終生を全努力して總奮迅せねばならぬを諭とす。

以上が本書の規模である。本書が細心の注意を以つて書かれ、決して無責任なことを一言一句も隠さない。本書わ私の全生命が脈うつ至誠の躍動である。私の良心わ本書の假名づかひをも改ためさした。發音のままな假名づかひとしたことを、賢明な讀者わ非難せぬであろお。

發音の實際から離れすぎ、文法の上えにさえ理解し難くいものに、漢字を讀ます送り假名がある。之わ一定して判かり易く改ためねばならぬ。本書わ送り假名の一定に勉めたが、出版時期を急いだ爲め、校正を嚴重にせず心ならずも不統一を看過したを宥されたい。

漢字を讀ます送り假名の不合理な一例を示せば、「上に」を「うえに」と讀むべきか「かみに」と讀むべきか、「中に」を「うちに」と讀むべきか「なかに」と讀むべきか、筆者自身にも時間が経てば判からなくなる。本書わ漢音のまま讀ます場合にわ送り假名を付けず、和訓にて讀ます場合にわ誘そいの送り假名を付けることとした。それゆえ「外」わ「がい」と讀まれ、「外と」わ「そと」と讀まれ、「外か」わ「ほか」と讀まれたい。送り假名に付い

てわ多々注意したいことがあるけれども、讀者の判斷に任かす。

昭和十年一月二十日

横濱市外新治村

美愛郷純真學園にて

岡本利吉

# 人間理學講話・目次

序文	三
疑惑篇	一七
第一章 青年の悩み	一九
第二章 生存と苦悶	二三
第三章 死命観	三〇
第四章 生命の犠牲	三六
第五章 安心立命	四七
信念篇	五九
第六章 肉體の生命力	六一
第七章 生理の調節作用	七五
第八章 心理の精神作用	八六

第九章 眞の一元唯物論……………九六

人間實質篇……………一〇三

第十章 精神體の實在……………一〇五

第十一章 自然界の法則……………一一三

第十二章 認識能力と物自體……………一二四

第十三章 精神體の證明……………一三一

第十四章 精神體の作用……………一五三

第十五章 人間性と價值判斷……………一五六

純美篇……………一七三

第十六章 客觀えの作用……………一七五

第十七章 美教が生まれた……………一八四

第十八章 美の人間性……………一九三

第十九章 自然美・藝術美・利用美……………一九九

第二十章 美を繞ぐるもの……………二〇九

第二十一章 恣慾と享樂……………二二六

第二十二章 人間生活……………二三三

純愛篇……………二三一

第二十三章 主觀えの作用……………二三三

第二十四章 利己心と愛他心……………三四三

第二十五章 慈善と同情……………三五三

第二十六章 愛の人間性……………二六二

第二十七章 純愛えの過程……………二六九

第二十八章 純愛生活……………二七九

純眞篇……………二八五

第二十九章 客觀相互えの作用……………二八七

第三十章 眞理の基礎……………二九六

第三十一章 知識の確實性……………三〇四

第三十二章 知識を求めて……………三〇〇

第三十三章 期待知識……………三二七

第三十四章 容認知識……………三三六

第三十五章 普遍の真理……………三五八

永久生命篇……………三六九

第三十六章 精神體の唯物普遍性……………三七一

第三十七章 精神體の生命……………三七八

第三十八章 精神體と肉體の關係……………三八六

第三十九章 精神體の構造……………四〇一

第四十章 絶對認識の自覺……………四一七

第四十一章 永久不死の生命……………四三六

第四十二章 永遠の宇宙生活……………四四七

自己完成篇……………四五七

第四十三章 人生の目的……………四五九

第四十四章 人間性の再確認……………四六五

第四十五章 普遍意識……………四七五

第四十六章 肉體生活の意義……………四八七

第四十七章 自己完成の條件……………四九八

人類完成篇……………五四九

第四十八章 慾望と其の統制……………五〇六

第四十九章 慾望統制の方向……………五二九

第五十章 修養と鍛鍊……………五三〇

第五十一章 自己と人類の完成……………五五一

第五十二章 我等の生活態度……………五五七

第五十三章 生活環境の淨化……………五六六

第五十四章 普遍史觀……………五七六

第五十五章 真理と最善……………五八二

第五十六章 教育と指導……………五九八

第五十七章 人類生活の規範化……………六〇五

第五十八章 規範生活の實現……………六一七

第五十九章 過激と穩健と超黨派……………六三八

第六十章 先驅者と大衆……………六三七

第六十一章 啓蒙と建設努力……………六五六

社會完成篇

第六十二章 時代の變遷…………… 六六九

第六十三章 社會生活の根本意識…………… 六七二

第六十四章 産業意識…………… 六八一

第六十五章 政治意識…………… 六九二

第六十六章 國策の根本…………… 七〇三

第六十七章 強民族の牽制…………… 七二七

第六十八章 弱民族の指導…………… 七三三

第六十九章 永久平和の確立…………… 七四一

使命篇

第七十章 道德の進化…………… 七六五

第七十一章 美教者の生活態度…………… 七六七

第七十二章 青年時代…………… 七七七

第七十三章 父母の任務…………… 七八九

第七十四章 先輩と友人…………… 八〇一

宗教篇

第七十五章 老人の使命…………… 八三五

第七十六章 女性の使命…………… 八四九

第七十七章 釋迦と基督と孔子…………… 八六七

第七十八章 今日の宗教…………… 八七五

第七十九章 隔離教團と美愛郷…………… 八八三

第八十章 神道と先驅者崇拜…………… 八九二

第八十一章 老人敬愛の樂園…………… 八九八

第八十二章 美愛眞善の淨土…………… 九〇五

第八十三章 先驅者の育成學園…………… 九一五

第八十四章 説話教壇と傳唱…………… 九三三

第八十五章 全生活と儀式…………… 九四二

超越篇

第八十六章 精神體の統一存在…………… 九六一

第八十七章 解説の瞬間…………… 九六八



第九十八章	靜止・盲動・自由	九七六
第八十九章	自由人・規範人・超越者	九八六
第九十章	憧がれと遊戯と藝術	九九四
第九十一章	超越者の意識活動	一〇〇〇
第九十二章	超越者群團の全生活	一〇〇七
<b>努力篇</b> ……………一〇一三		
第九十三章	努力主義か安逸主義か	一〇一五
第九十四章	肉體生活わ全使命	一〇二二
第九十五章	個人榮華の夢	一〇三〇
第九十六章	團體生活と團體努力	一〇四一
第九十七章	全體意識と部分意識	一〇四八
第九十八章	本源努力と支脈努力	一〇五六
第九十九章	無病強健の最有效果	一〇六四
第一百章	全努力の總奮迅	一〇七二

【人間理學講話 目次畢】

疑 惑 篇

學問の疑惑に始まる。悩みに思う疑惑から、力強い宗教も意義ある哲學も起つた。

悩みを知らない青年を、無理に教えて試験などするから、氣力のない詰め込み教育となる。

悩みにまで、深い疑惑を持つ者が、眞に學問に徹底し、人生と社會の眞實を見破つて、價値ある努力を続ける。民族と人類の歴史を、これらの人に依つて進められるのである。

私わ疑惑を持つていた。軽い疑問でなく、大きな悩みの、深い疑惑を持つてゐた。この悩みの疑惑から、本書が結實したのである。

私の如く大きな悩みの深い疑惑を持つ者だけが、心から本書を理解し得る。私わ果たして如何なる悩みの疑惑を持つていたのか。悩みと疑惑を持たない氣樂な人々わ、人間實質と人間性の解説に接するまえ、まづ人生の大きな悩みと、深い疑惑を知ろおぞ。

## 第一章 青年の悩み

釋迦も悩み、基督も悩み、孔子も悩み、ソクラテスも悩んだ。悩みこそ人生であるまいか。他の聲が言う。朗らかに！ 朗らかに！ 乙女わ歌い、童兒わ走り、本能のまゝな自然の生活が人生であるまいか。げにも我等わ岐路に立つ。どちらが本當の人生か。この疑問？ この悩み！ やつぱり人生わ悩みであるまいか。

悩みを知らなかつた童兒の私わ、さいふん夢中に遊んだ。腹に巻く帯を落として歸つたほど、さいふん夢中に遊んだ。それゆえ悩みよりも遊戯が、また本能のまゝな自然の享樂が、偽わらない人生であるまいか。しかし、寢物語りに祖先の價値ある行ないを聞かされて、その偉大さに價値を感じ、夢中の遊戯から價値ある人眞似の方えと、餓鬼大將の戦争ごつこや、勝負を争う運動競技や、そおしたことに少年の私わ、芽ばえたばかりの意識を向けた。

マホメッドわ片手にコーランを持ち片手に劍を握つた。全人類の幸福の爲めなら、正義を守る戦争もよい。萬人労働の使命に遅れぬ鍛錬の爲めなら、勝利を争う運動競技も罪惡でない。けれども價値意識わ、年々と高くえ高くえと進んだ。

人生わ價値である。本統に價値に目醒めて人生を思えば、無駄に一日も過ごし得ない。人生とわ何にぞ。人生の價値とわ何にぞ。悩みが、深い悩みが、永い間だ私の心を閉ぢ込めた。少年期を過ぎて、青年期に入つた私の

惱みわ、まづ貴とい人生を何にぞと尋ねた。貴とい人生に自分自身を價值つけて、その價值に自分自身を完成しよと、青年期の私わ清い希望に燃えたのである。

向上心を持たぬ者わない。希望を持たぬ者もない。それなら、向上心と希望が、貴とい價值の内容であるか。希望に燃えて向上しよと、男も女も青年わ貴とく心の血を湧かしている。しかし、無自覺な者もいる。すゝぶんと無自覺な者もゐる。帶を落として遊んだ私が、自覺せず本能のまゝに育つたなら、私も一人前の不良少年となつたであらう。私を自覺に導いたものわ歴史であつた。偉人の價值ある行ないであつた。

寢物語りに聞かされたことわ、祖先の價值ある行ないであつた。理性に目ざめるまえ、多くの少年わ偉人の傳記に親しむ。多くの青年わ祖國と世界の歴史に親しむ。私もこの過程を通り、幸にも不良少年とならず、價值ある希望の方向を見詰めた。之わ想像であるが、童兒の私が寢物語りに猥褻なことを聞かされていたら、恐らく私わ遊蕩兒になつたであらう。またもし童兒の私が寢物語りに殺人強盜の武勇傳を聞かされていたなら、私も殺人強盜の英雄になつたであらう。

私わ感謝する。寢物語りをして呉れた祖母に、厚く私わ感謝する。祖母わ私に祖先の貴とい行ないを聞かして呉れた。偉大な過去の人々を語つて呉れた。祖母わ明治維新の志士を出した漢學塾に隣りして住み、讀書と學問をしたわでないが、偉大な人々の生い立ちを知つていた。それを幼ない私に語つて呉れたのである。

それからの私わ少年期を通じて偉人傳を愛讀し、誰れよりも大楠公に感激した。けれども、支那の歴史と西洋の歴史を知つてから、私の心わ次第に廣く全人類を思ふ普遍意識の方向に開けた。釋迦や孔子や基督を知つてから、普遍意識の範圍が益々擴がるを覺えた。遂に眞理と最善を確認し、普遍意識の自己完成を自覺したが、それまでの私わ偉人に憧がれて偉大な希望を燃やし、何にかしら偉大な行ないをせねばならぬと思つた。どおすれば

よいのか。それについての惱みが、長いこと青年期の私を苦しめた。

種々なことを思つてみた。名譽も思つてみた。それにわ富を積まねばならぬが、正しい勞務の報酬で富を積むことわ、數學の計算が許してくれない。惱みわ深くなる。學問？ 知識！ 憧がれの惱みを見詰め、凡べてを凡べて基礎深く考えるために、私の前半生わ自然科学に没頭させられた。好きでなく必要から、その必要のまえに、私わ根氣よく従順に没頭した。そして自然科学により、深く深く人生を考え、幾十年の刻苦が、遂に人間學を結晶させた。

平易に説けと言う。それわ難つかしい。人間學わ人生に關する苦惱の總解決である。それわ科學の總綜合であり、知識と學問の根底に叡智を向けて、悉ごとくの疑問を總解決する。それを平易に説けと言う。これほど難つかしいことわない。けれども平易に説かねばならぬ。しかし平易にわ程度がある。簡単に結論を指示するだけならば、なんの雜作もない。それわ神の名を借つて啓示する程度であり、そおした態度を過去の宗教が取つたのを不充分に思う。

先驅する人々に強い信念を與えるため、できるだけ平易に本書わ解説を試みる。本書に依つて強い信念を握り續き續き多くの先驅者が出るならば、なんと大きな日本と世界の幸福であることよ。先驅者わ自己完成の實例を見せつゝ、また經濟生活學の眞理と最善を實現しよと努力せねばならぬ。この努力わ詩歌や説話や創作等によつて、全人類を啓蒙することから始められる。最も平易な解説わ詩歌や説話や創作であり、その企圖を先驅者だちに深く待望する。

## 第二章 生存と苦悶

幾人かの青年が私を訪ねて告白した。彼等わ生存に行詰まり、結局の死を決心したが、愈々となると中々死ねない。彼等の一人わ海に投じ、彼等の一人わ鐵道線路に横臥した。死の瞬間に心に残る何物か彼等を引留め、彼等わ再び娑婆に歸えり、私を訪問したのである。死？！ 敏感な多くの青年わ、それに悩んでいる。

死を希がうのでわない。生存を希がうのだ。希がおても生存が續け難いとき、敏感な人わ結局の死に急ぐのだ。それを何故に彼等わ中止したのか。

心に残る何物か彼等を引留めた。何物が心に残つたのか。疑惑！ 結局を死と思う、その思いに付いての疑惑？ 實にその通りである。生存わ一時で、結局を死と思えば、生存が面白ければ生存を續け、生存が苦痛となれば、ひと思いに結局の死に急ぐわ當然である。けれども結局を死と思う、その思いに疑惑が起これば、生存に行詰まつても、死に切れなくなる。果たして人生の結局わ死であるか。

人生の結局が死でなければ、生存が面白くなくても、死に急げない。死刑囚も直後の死を知つて朝食を取る。石田三成わ刑死の前夜に薬を飲んで下痢を治したと傳えられる。博多聖福寺の高名な禪僧仙崖和尚わ、死にたくない死にたくない遺偈を興えた。弟子たち恐縮して再び遺偈を乞うと、ほんまにほんまにと、その上えに書き加えた。生存えの執着？ 否な否な、執着でない生存の事實、これこそ古今の疑惑である。

釋迦わ悩んだ。彼れの悩みを、老死を免かれない死の豫感から、哲學者の苦悶に落ちたと解釋してわならぬ。釋迦の悩みわ、肉體人の生存に行詰まりを豫感したからである。彼れ一人だけでなく、彼の國民全體が生存に行詰まり、恐ろしい死、慘殺、墜殺の嵐の前に立たされたを豫感したから、釋迦わ激しく悩んだのである。

釋迦わ何に不自由もない大國の王子でなく、彼れの國わマガダ國とコーサラ國の中間に挟まる小邑であり、覇を争そう兩大國の犠牲となつて、いつ突然の強襲を受けるかも知れない不安極まる地位に置かれていた。敏感な釋迦わ之に氣付き、彼れの國民全體が悲惨な運命に遭遇せねばならぬ生存の行詰まりを自覺して、唯一更生の道を出家に求めたのである。

釋迦わ密かに城を抜けて出家した。帝王をさえも教える最上階級の波羅門が獨占する教學を修めて、人生觀を新らしく立て直し、階級制度をも打破し、互いに争そうマガダ王とコーサラ王と、その他の國々の王や、戰國時代の將士等を正義人道に導びき、彼れ自身と同時に、彼れの國民、並びに全人類の永久に互たる生存の安定を圖かるおとしたのが、釋迦出家の動機であつたことわ確かである。

増一阿含經などに書き残された處によると、マガダ國と覇を争そたコーサラ國の毘瑠陀王わ、釋迦の生れたカピラバスツ城を攻め滅ぼした。一度わ釋迦の説法によつて遠征軍を引き返したけれども、マガダ國と覇權を争そう關係から、釋迦が遠くえ旅行していた間だに襲撃し大虐殺を行のおた。釋迦の弟子摩訶男わ慘狀を見るに忍びず、自分が河中に沈みいる間だけ暴虐を中止することを乞い、彼れわ河のなかに潜り込んだ。王わ間もなく浮び出てくると思おていたのに、何時までも水面に出て來ないので、驚いて水底を搜がさしたら、摩訶男わ水中の樹の根に髪を結び溺死していたと言ふことである。

釋迦の出家わ生存の行詰まりからである。しかし生存の行詰まりから彼れわ直ちに死を選ばず、却つて生存の

眞實を極めよとした。當時の印度思想は肉體を輕んじて心靈を重んじ、肉體死後に心靈は生前の所行によつて輪廻し禍福の間だを無限に轉生するとした。波羅門の僧侶たちは、難行苦行して肉體を苦しめるならば、その苦痛に耐える強き心靈は後世の世で福徳を受けるものと信仰したので彼れも出家して難行苦行した。また波羅門教で階級を嚴重に區別して前世の因縁を説き、梵天神の口より生まれた最上位の波羅門族に死後の安定が約束されてゐるが、梵天神の腕より生まれた帝王や武人の刹帝利族は大努力をせぬと死後の輪廻が不安であり、梵天神の膝より生れた庶民の毘舍階級や、その脚より生まれた首陀羅の奴隸階級は如何に努力しても死後の福徳が望まれないとゆうほどに説いた。この偏頗を信仰と社會制度から打破して、全人類死後にも續く安定を與えることが、釋迦出家の動機であつたのである。

行詰まれば誰れでも打開策を講ずる。行詰まりは釋迦の例でも見る如く、精神生活に付いてよりも、肉體の物質生活に付いてである。死を決意しながらも死に切れず私を訪問した人々にも、肉體の物質生活に行詰まりがあつた。その行詰まりから人生の終局を死と解釋すれば、進んで死を選ぶが敏感な人々の當然な判断であるまいか。私わ幾回も生活の方針を變更した。行詰まつたと言うよりも、行詰まりを豫感すると、また前途に希望を失なえば、私わ生活の方針を變更するに躊躇しなかつた。

私わ官廳の吏員をしていた。その當時わ日本の財政が困難になると、即座に行政整理をした。行政整理とわ吏員を淘汰して、歳出を節約することである。吏員生活をしてゐて行政整理に出遇うと、誰れでも深く考えさせられる。何んの資産もなく月給で生活し、別に勞働の方法を知らない者が行政整理の淘汰に遇えば、忽ち生活に行詰まる。幸に私わ淘汰されず、残されて月給を増される果報を受けたが、しかし私の心わ傷けられた。淘汰された同僚を思うとき、他人のこととわあるが、同じ運命が何時か私の上にも來るである。家庭を持つならば、妻

子の上にも同じ運命が來るである。かく思うと、吏員は游泳術を巧妙にせねばならなくなる。その偽善、それに私わ耐え得たである。か。

なんの爲めに私わ吏員を志願したのか。それわ官廳の吏員となれば、國家の爲めにまた國民の爲めに、自己を忘れて最大の努力を爲し得ると思つたからである。商工勞農の人々わ、みな自分の爲めに努力し、たゞ官廳の吏員のみが、國家の爲めに全人類の爲めに努力すると、私の幼な心わ誤認してゐた。

教育家を思い、學者を思い、釋迦や基督や宗教家を思わなくてもなかつた。しかし教育家は小學校でも見る如く子供や青年に知識の傳授をする程度であり、教育家の教える書物を書く學者のほおが遙かに貴いと思つた。それでも學者は狭い一部の學問に従事するだけであり、廣く國民と人類に盡す者わ官廳の吏員、その中でも政治家である。少年の私に映じた。直ぐ政治家になれないから、順序として官廳の吏員を選んだのである。

釋迦や基督も思つてみたが、近寄るにわ餘りにも高すぎる。その代理をする僧侶や牧師の宗教家わ、幼ない私の心に偽善者として映らなかつた。苦學して私わ吏員となることに成功した。私の地位は低かつたが、兵卒より上がる將校を思つて、最大努力をしようと思つた。けれども意外であつた。一たび志を得て官廳に入ると、その内部の状態は完全に私を失望させた。吏員は決して最大努力をして國民の爲めに盡してゐるのでなく、俸給と地位の安全の爲めに過失のない最小限度の努力をし、また吏員の行動は法律規則で束縛されてゐるを見た。完全な失望と、行政整理で受けた生活の不安から、若い私わ新しい生活に轉向しようと思つた。

好機が到來し、私わ大會社の事務員となることわ出來た。そこで私わ懸念の努力をし、取引を通して多くの人々に便宜を與えよとした。私の地位は次第に進んだ。しかし疑惑が再び私を訪れた。大資本の前に小資本が蹴散らされ、一部の人が大きな富を積む反對に、多數の人が貧困に泣く。その原因を追求すると、慈善でも

保険でも救い切れない。それら生活組織に不合理があるからである。之を合理化することが、眞に國民幸福のためであり、また世界と全人類の大きな寄與であるまいか。私わ大會社の安全な地位と俸給を辭退して、生活組織を合理化する眞理と最善の研究に向かうため、再び生活の大轉向を斷行した。

眞理と最善、判きりとした此の認識は最近のことである。私わ外國の社會運動に關する大體の理解を握り、當時また着手されてゐなかつたことに私の最大努力を盡くそと決意した。自分自身を最有効に役立てよとする態度は、私の生涯に一貫する根本動念であり、この根本動念から私わ先づ消費組合の確立に盡くした。

無産者の消費組合我國に於て不可能とされてゐた。それを私わ可能にした。營利會社にゐる間に體驗した帳簿と物品整理の嚴重な方針が、私の指導の下に我國の消費組合運動を可能にした。七年に亘たる全能力的努力によつて我國の無産者消費組合確立したのである。しかし其の前途を思うと、果して期待の結果を擧げ得るか、疑問となつた。なぜなら我國大衆は目前の利害に囚われて廣く永久の爲めに犠牲を拂う氣分に缺け、従がつて消費組合に加入しても良品を安價に買う目前の利害計算のみで、剩餘利益を蓄積し共働の生産に進む生活組織の合理化可能でなく、また消費組合學問の理論を缺いて強く大衆を引き付けることが出来ないを發見した。

青年期に入る頃から人生に深い疑惑を持つた。この疑惑はどおしても解決することができなかつた。宗教に問ひ、哲學書も讀んでみた。けれども少しも人生の疑惑を解決することが出来なかつた。しかし、どおしても解決せねばならぬ。之を明らかに解決し、人間性を判然と確認して、そのとき、その基礎の上に社會運動が總訂正されよおぞ。それまでわ單なる利害の打算からだけであり、單なる利害の打算からだけでわ、苦難の多い生活組織の合理化を徹底し得る筈がない。そこに歐米から來た社會運動の缺陷があり、寄せてわ退く我國社會運動の最も弱い缺點もある。一たい社會生活さえ善くなれば、それで好いと言ふのか。社會運動が目的を達して、日本と世

界の物質生活が安定しさえすれば、もおそれで好いと言ふのか。いないな、物質生活わ人生の入口であり、まづ物質生活を安定し、然る後ちに全人類の人間完成を圖からねばならぬ。人間完成こそ自己と全人類の目的であり、社會運動が生活組織を合理化するのわ、人間完成の眞に大きな生存目的に行く順序と階段である。

誠に大きく本末を顛倒してゐた。歐米思想はこの故に行詰まる。全たく新らしく考え直さねばならない。かく痛感して私わ青年時代から生活餘暇の全部を、この問題の解決に捧げた。自然科学を研究したのも、根本的な準備であつたのである。

無産者の消費組合漸く形を整へた。私わ其れから離れる準備をした。しかし無責任でわいけない。私に代わる人物を探がし、私が離れても差支えないよおにせねばならぬ。その準備に凡そ二年を費やした。その間に人生に關する私の研究益々鋭くなつた。人間學が最初の姿『美教準備』として發表されたのわ、消費組合が私を無用とした頃であつた。私わ退いて農村行脚をしつゝ、人間性確認の考察を一層深刻にした。

農業こそ正しい生活であるまいか。家族の生活を支持せねばならぬ私わ自分を農業に従事さそと決意した。この決意を深めた大きな動機は、數年後の日本と世界の最大問題が必らず農村の疲弊と更生であると豫想したことであつた。人口問題、特に農家の次男三男に付いて考へるならば、また都會と農村の關係を嚴重に考へるならば、必らず判明することである。私わ數年後に起るであろう農村疲弊の聲を豫感し、山岳原野の開拓が更生の基礎方針であると氣付いた。それに奮迅する中心人物を養成するため、都會に生れ都會に育つた私わ、斷然と富士南岳の愛鷹山中に新開墾の共働農場を起し、また冬期の農閑期に農村青年を育成する農村青年共働學校を共に建てた。この私の生活轉廻無謀に近いほど突飛であつた。それでも全能力的努力が遂に私を成功させた。五年の農場生活中、毎日未明の三時に起床して朝食まえの數時間を最有効に活用し、私わ我等の思想體系を完成

した。美教わ人間學と呼び得る正確さに到着し、三百名の講了生が全國の村々に歸つて、人間學の人間性を見詰めて、眞理と最善の規範生活を實現する爲めに努力している。

嘆くことわない。行詰まれば轉廻しろ。死を選ぶ前に、新しい生存の方針を熟慮しろ。それでも死を人生の終局と思えば、勇敢に死を選べ。しかし死を斷じて人生の終局でない。飽くまでも生きる。眞の人生を求めて、生きる爲めに力強く頑張れ。

行詰まれば轉廻しろ。生存の方法が多種多様である。一方に行詰まれば他方に出ろ。私わ三たび轉廻した。更らに轉廻して、横濱郊外の新治村に最初の農村部落生活團體を建設し、そこで力強い信念の中堅先驅者を育成するため、美愛郷共働農場と純眞學園を開設した。それわ農家の次三男を生活さすに、村里を離れた原野山岳へ移住さすわ、無理が多すぎることを發見したからである。一番よい方法わ現在の農村部落を共働の基礎に更生さし段取りよい共働の分擔仕事から生まれる餘剩勞力で、附近の原野や山岳を開拓することである。かく氣付いて、飼糧を自給する剩餘ある有畜の部落に共働農業を實行しつつ、その寮圍氣で中堅青年を育てよと、乏しい資力を最有効に役立て、最小限度の必要な設備をした。

いま私わ爲し得る極限の努力をしてゐる。しかし私に取つて最大の任務わ、人間學の信念を廣く日本と世界の全人類に知らすことである。純眞學園わ人間學を徹底して研究せんとする人々にも自由な在園を許す。私と先驅者わ大きな此の使命の爲めに飽く迄も奮迅し續けるであらう。心ある人も同じ使命の爲めに共力しよとぞ。一人の大努力よりも、多くの人の應分な共力が、一番大きな結果を擧げる。日本と世界の全人類の爲め、私わ多くの人々に、地位と立場を異にしつゝも、同じ使命の爲め應分の共力をするよと待望する。

日本も世界も行詰まつた。行詰まりの原因わ、物質生活の眞理と最善が蔽われて實現されないからでもあるが

最根本に人間性を誤認する虚偽があるからである。基督教や佛教でも人間性を説くが、基督教わせい／＼社會の爲めに盡せば、造物主の天國に行けると言うくらいであり、造物主の存在が怪しくなるにつれ、基督教そのものが、まつきに行詰まつた。また佛教わ物質の實在を否定して各個の人間をも無視し、従がつて努力の氣分を去勢して、強い奮發の信念を起こすに役立たない。幸にも人間學に依つて、民族と人類の大衆を純美純愛眞の人間性に目醒めさし、眞理と最善を實現する不屈の信念を永久不死の自己完成にまで燃やすことができれば、日本と世界の行詰まりわ必ず轉回されて光榮の新发展しよとぞ。

民族と人類の大衆を眞に啓蒙されて自覺すれば、人間性の自己完成を基礎に眞理と最善が實現するわ確定してゐる。それまでわ如何なることを如何にしよとおしても、例えば政治の力強い支配からでも、教育の親切な指導からでも、もちろん愚かな迷信を説く過去宗教の儀式や、狭い階級意識から争いあう社會運動の示威くらいで、斷じて安定と光榮の規範社會わ實現しない。なぜなら、虚偽と偽善が横行してゐる間だわ、正しい人々わ遠ざけられて、政治も教育も經濟も不純な人々によつて支配されるから、どんなに組織を改めてみても、また支配の人を繰り返えし取替えてみても、たゞ不純が不純に代わるだけであり、決して正しい人が中心になる眞理と最善わ實現されないからである。それゆえ一日も早く自己完成の方向を正しく知らし、純美純愛眞の人間性を確認さして、眞理と最善の強い自覺を興えることが、なによりも第一に必要なことである。かくして始めて不安と窮乏の有らゆる行詰まりが打開される。おゝ先驅者よ、まづ自分の心を清くし、家族をも隣人をも友人をも正しい心の人間性に誘い、大衆の民族と全人類に爲し得る限りの最大努力を寄與して、まづ心の啓蒙に盡くそとぞ。人間學わ此の爲めに立ちあがる。哲學と學問と、藝術と文學と、運動と實踐と、凡べてわ凡べて、また、此の爲めに立ちあがらねばならぬ。

### 第三章 死 命 觀

多くの人々が人生の終局を死と思う。人生の終局がもし死であれば、スピード時代の今日、終點に急ぐ急行列車を選ぶ程度に、人生の終局の死に急ぐを非難する理由はない。果たして人生の終局が死であるのか。

人生五十年、何人も死を免かれぬ。釋迦の悟りも死であつた。釋迦は言う、神にたよつて天に上ほつても、神が氣まぐれであるから、神の氣持ちが變つると再び下界に落とされるである。果たして、そんな氣まぐれの神があるであらうか。かく疑ひおた釋迦は遂に人間の運命を支配する神の存在を否定し、同時に彼れが人生の終局を死と觀じた。人間の運命が結局死であると觀念したのである。

人間の運命を支配する神がないことになると、我等が自由となつて解放され、獨立自存の人生が朗らかに開ける。しかし、我國古來の神々が印度や西洋にやう人間運命の支配者でなく、我等の祖先の心靈を神と崇めて尊敬するのである。だから我國古來の神々が印度や西洋でやう造物の神と相違し、我等人間と同じよおに朗らかな獨自の存在であり、印度や西洋の傳説となつてゐる唯一造物神の審判が我國になつた。かくの如く唯一造物神を否定すれば、神の僕でない獨自の人生が確定し、人生五十年、その肉體死後に我等の心靈を神と崇めて尊敬するとしても、五十年の肉體人生が死に行かねばならぬ等の運命が、結局、死を最後のものと觀念せねばならぬでわいなか。それでわ朗らかな自由の人生が消滅して、たゞ暗黒が我等を埋葬することになる。

祖先を崇拜する我が古神道が幽冥界を説く。けれども肉體死後に心靈が行く所を判然と示さない。そこに我國思想の動搖があり、東洋の未開な多神教の説を受け入れて幽冥界に争いあう善靈と惡靈を説き、また基督教その他の一神教を受け入れて、天國に永久の生命を見詰めよおとする。

我國古神道にやう八百萬の神々、自己を完成した祖先の人間實質が永久不滅に高天原の大自然生活をするこゝと、解しなければならぬ。そのとき人間學の説くところの古神道と一致する。けれども、支那や未開東洋の思想を輸入して幽冥界に鬼神を考え、善靈と惡靈との闘争によつて人間社會の禍福が決定されると思えば、人間以外に運命の支配者が存在することとなり、朗らかな人生がここに終了して、或いは印度人の如く、或いはユダヤ人の如く、天地萬物を創造した造物神を假想し、我等が無價値な僕とならねばならぬ。釋迦は此の類の迷信に耐え兼ねて神を否定し、天上天下唯だ大我のみ獨り尊く實在すると佛教の悟りに到着した。

人間の運命を支配する神を假定する限り、善惡多數の神々が争うと見る多神教が進歩して、一神教となるが思想展開の順序である。東洋諸國の古い思想が善惡の多神が争う假定に立ち、人多く善に組みして善神を祈れば、善神が強くなつて惡靈を克服し、氣候順を得て五穀豐饒するけれども、反對に人多く惡に組みして惡靈が天下に増長すれば、氣候不順の凶作と惡疫流行の禍が起ると述べ、そこに人間運命を支配する善神の歸依と禮拜を處世の根本とした。かく善惡の神々が争うことによつて人間社會の運命が決定されると説く思想で、我等の生存が不安となり、老死よりも早く飢饉と疫病が襲來し、人間が大量に常闇の黄泉國に連れて行かれることにもなる。だから東洋の多神教が苦難の死命觀から離れない。それで人間性が満足されず、人間運命を支配する神を假定する限りに於て、多神教は一神教に進み、唯一造物神の名を唱えて禮拜しさえすれば永久生命の幸福が天國淨土で與えられ、反對に其の名を罵れば疾病や洪水等の苦難が來ると教えるわ、思想進歩の當然な順序



である。それゆえ一神教が多神教を克服した。我國近代に起こつた天理教や金光教や大本教わ、東洋の多神教に西洋の一神教を交配した和洋折衷の雜種である。

一神教わ純粹なものも、また交配の雜種も、永久生命を説いてゐる。それに依つて死命觀を驅逐されたかに見えるが、しかし造物主の唯一神を信仰して與えられる永久生命わ、人間が卑屈な奴隸になることを條件とし、我等の生命わ專横な唯一神の恩恵によつて支配され、屈辱と不安の最大なものを受ねばならぬ。安定を求めつても自尊心ある人間わ、唯一神からの恩恵に忍辱するを氣持ちよく感じない。我等にこの人間性がある限り、唯一神を禮拜しても果たして永久生命が保證されるであらうか。この疑惑から永久生命を説く基督教にも、實わ隠すことのできない死命觀が残るのである。基督教に依つてわ、人間性を自覺すれば自覺するほど、永久生命の自己完成に行けず、自覺して修養し努力すれば、逆に地獄え落とされる危険がある。愛と永久生命を説く基督教も、恐ろしい死命觀を我等人間の意識え突き付けてゐる。

多神教や一神教を釋迦わ勇敢に否定したが、釋迦その人の教學わ判然と傳わらない。經文の全部わ後世の著作であり、釋迦の教えそのまゝを傳えるものわない。ともかくも古印度に於て釋迦佛教わ一時有神論を征服したがその後アラビアより傳わる一神教わ佛教を粉碎し、釋迦の遺跡の隨一とされる佛陀伽耶の大塔までも土中に埋没させた。眞正な釋迦佛教わ遂に消滅を餘儀なくされ、佛教と一神教またわ多神教との雜種が、佛教の名に依つて處々に復活しつゝも、平易に神を信仰する印度教が遂に佛教を印度より追い出した。追い出された雜種佛教わ支那より朝鮮より日本えと傳來し、我國今日の佛教わ其の流れを汲んでゐる。自稱して大乘佛教と奢るが、實わ阿彌陀如來等の偶像を禮拜し、念佛や題目を唱える程度のもので、親鸞や日蓮の教えわ處世訓でしかない。

釋迦の教學わ傳わらない。恐らく釋迦わ人生の終局を死と悟つたであらう。古印度の諸傳説と波羅門教の信仰

でわ、人間の運命を支配する神を假定したが、神の假定を疑ごつた釋迦わ人間を獨自の存在と悟つて天上天下唯我獨尊と説き、また神に對する罪業の因縁から流轉して再び苦痛の生物世界え個々に生き返えることのない寂滅死を涅槃と名づけ、火を吹き消した如く涅槃の寂滅死に行くを人生の最後と悟つたのであるらしい。こおした考え方を後世小乗と非難するが、釋迦その人わ涅槃を寂滅死と悟つたらしい。

猛獸が住み暴虐が戰かう熱帯の戰國印度に、人生の快樂わなかつた。人生を苦と感じ諸行を無常と思つた釋迦が、火を吹き消した寂滅死を念じたことわ確かである。しかし人智が開け自然が克服されるに従がい、平和な印度にわ人生の快樂が見えだした。人生が快樂ならば、釋迦の如く寂滅死を念願し得るであらうか。そこから佛教の寂滅死命觀わ動搖して、アラビアの一神教が印度にも侵入し、また古傳説の神々が新らしく復活して印度教が今盛んである。

釋迦の元來思想わ印度に滅びた。けれども、それとも似にもものが近世哲學に興つた。近世哲學を支配する思想わ、全生命を一團と見て、それを個人の生命に對し大我と名づける。大我を宇宙の生命と説く者もあれば、また自然世界の理法が大我だと理解する者もある。ともかくも宇宙間に大きな生命が一貫して流れ、個人わ其の生命を受けて活動するが、個人の體力にわ限りがあり、個人の肉體わ死なねばならず、そのとき我等の生命わ大我の中に還えらう。これ釋迦の悟りと根本に於て一致する哲學の考え方であり、釋迦と其の以前の印度唯心哲學わ宇宙全體の生命の流れを假定して萬象の本源となし、萬物とゆうけれども、實わ物體でなく、宇宙生命の動搖が影の如く、物體の姿を現わすに過ぎぬとした。

萬物の本源が宇宙一體の生命であれば、またわ我等個人の生命が宇宙一體の生命の分流でもあれば、我等が氣まゝに終局の死に急ぐを非難し得るであらうか。哲學的な考え方わ、個人の生命が消滅して全體の中え、また

わ本源え行くを死とゆう。それならば却つて死を喜ばねばならぬ。死を愉快に思わねばならぬ。釋迦わ寂滅の大往生を喜んで再び假りの姿に生き返えらぬ永久の死を願ごおた。大我を説く哲學者もまた死を喜びとし、急行列車で終局の死に急ぐを讚美せねばならぬ。しかし現實に彼等わ死を喜ばず、また死に急がない。彼等わ終局に死命觀を持つけれども、その信念に忠實でない。これ何に意味するのか。

人間性が喜怒哀樂を決定する。人間性が満足されると喜樂を覺え、人間性が拒絶されると哀しみと怒りさえも覺える。之わ人間心理の一般法則であり、理窟でわ否認できない事實である。事實こそ眞理であり、虚偽とわ事實に反することをゆう。

虚偽でわいけない。我等わ最も重大な人間生死の終局に付き、事實を判明に確認せねばならぬ。大我を説いて個人々々の小我を宇宙全生命の一部とする人々よ、大我と小我の關係に付き、判然とした區別の事實を確認するのか。確認のない處に疑惑と混亂が起る。疑惑と混亂こそ思想の動搖であり、釋迦佛教の難點と哲學の了解し難き理由が此に秘む。造物神を説く基督教の破綻も、神と人との關係が餘りにも奇妙不思議なからである。

説明わ如何に巧妙でも、事實に一致せねば虚偽の空想である。過去二千年の哲學わ悉く虚偽の空想であつた。たゞ事實のみが眞理である。もし大我のみを眞の生命と假定するならば、之を判明に理解する爲め、宇宙全生命の大我を大宇宙そのものとしよおか。しかるとき小我わ大宇宙の一部分、結局それわ分子か原子か電子となる。それならば存在わ小我のみであり、大我とゆうわ小我の群集する假りの姿に付ける名稱でしかない。何故ならば宇宙わ存在でなく、星々と空間物質のみが存在であり、星々と空間物質の存在を總稱して、假りに宇宙と名づけるまでである。星々さえも實わ存在でなく、山や川や海等々の實物のみが存在であり、山や川や海等々の實物を總稱して假りに地球と名づけ、また總稱して星ともゆう。しかし山や川や川さえも實わ存在でなく、眞に存在するも

のわ追究すると、分子か原子か電子でしなくなる。

生命わ物の活動力とされる。假りに兩者を區別して物の外かに生命があるとしよお。それでも眞に實在する生命わたゞ個人の生命だけであり、宇宙一體の生命など、そんなものが實在する筈わなく、假りに宇宙一體の生命或わ個人の生命の合計を大我とゆうならば、大我わ實在しない言葉であるに止まり、眞に實在する個人々々の生命を假りに總稱して大我と名づけるまでである。即ち大我わ事實に於て否定され、我等の個我のみが肯定されて、生命わ個我の持つ事實であることが判明する。疑問として残るわ、たゞ個我生命の存続期間であり、個我生命が肉體と共に死滅すると觀念するを死命觀とし、反對に個我の眞生命わ肉體死後にも存続すると主張するを永久生命觀とする。死命觀と永久生命觀と、果たして孰れが事實であるか。我等わ人生の最大問題として嚴肅に之を確認せねばならぬ。現代わ唯物論の死命觀で大衆の常識を支配してゐる。あらゆる罪惡と亂倫不正が唯物死命觀の常識から淵源し、大衆わいま行詰まりの瀧壺に落ちる激流を泳いでゐる。顧みれば過去の宗教も哲學も悉ごとく幾割かの死命觀を隠していた。今それが百パーセントに現われて、唯物死命觀の常識に爛熟し、之によつて世界わ行詰まりの瀧壺に急轉直下しつゝある。

長いあいだ言葉が眞實を欺いてきた。基督の聖書にさえ言葉を神だとも言うてゐる。事實を無視して机上に言葉を捏ね廻すことを觀念論とゆう。死命觀わ宗教でも哲學でも、また常識でも悉ごとく觀念論であり、事實の確認を缺いで、たゞ机上に觀念の想像を捏ね廻した。斷然とこの態度を抛棄し、事實を事實として確認せねばならぬ。人間理學わ嚴肅に人生の最大問題に付いて事實の確認を徹底せしめ、純美純愛純眞の人間性を明らかにして、永久不死の自己完成を判然と指示する。大衆よ、之によつて過去の誤認識を總清算し、瀧壺に急ぐ行詰まりの激流から躍り上がつて、力強く大地を踏み占め、朗らかな安定と光榮の眞人生を全人類に約束しよおぞ。

## 第四章 生命の犠牲

命の大安賣りが流行する。使命觀からでなく、名譽心からでもなく、單純に安價な命の大安賣りが流行する。生存に行詰まると、轉回の氣力に缺けた者わ、安價に生命を投げ賣りする愚かな方向に行くのである。毎日の新聞になんと愚かな命の大安賣りが報道されることよ。病める父を殺した記事、保険金はしさに弟を殺した記事、母が愛兒さえ殺した記事、慘殺、墜殺、憎殺、盜殺、戯れに人殺しをすることさえもある。餘りにも馬鹿々々しい命の大安賣りが、毎日の新聞を賑わす。此等わ精神に異狀がない限り、人間實質と人間性の誤認識から起る發作である。

一人一殺主義とゆう言葉さえ聞かされる。社會組織が單純な昔でわ、横暴な專制をする悪い一人の支配者を殺すことによつて、政治の弊害が一掃され、民衆の幸福が取り返えされたので、悪い支配者を除く一人一殺主義を尊い生命の犠牲であつた。物事が複雑となつた今日でわ、政治の主腦者の考え一つで、社會の制度や組織を改めることができず、従がつて政治の主腦者を取替えても、容易に時代の行詰まりは轉回されない。それゆえ昔わ意義深かつた一人一殺主義も、今日でわ支配階級や特權階級に反省を興える程度であり、犠牲を敢行する人が想像するほど効果わ舉らない。濱口氏や犬養氏等個人として見ると立派な人物であつた。それだけ支配階級や特權階級に興える反省わ大きい。しかし民衆の心に響く感動わ之が爲めに割引され、また新聞の三面記事に愚かな命

の大安賣りが毎日の如く報道されることによつて、尊い生命の犠牲と愚かな生命の犠牲とが、時代人の耳に混合して響く。ともかくも人生の終局が死であるならば、生存に行詰まれば、軽い氣持ちで死を選ぶわ當然な人生の方向である。死命觀わ如何なる理由からも死に急ぐを非難し得ない。老い朽ちる醜い死を待たず、若い元氣の間だに勇敢な死を選ぶが、むしろ尊い死命の人生觀であるわ。命の大安賣りが流行するわ、死命の人生觀が常識となつた結果でもあらねばならぬ。

死が生命の終局であれば、終局に急ぐ過程に於て、偉大な最後の事業をせねばならぬと見える。昔の人わ元服したばかりの少年さえも、偉大な最後の事業を急がす爲め戰場に送つた。彼等の人生觀わ通俗佛教に依つて靈魂の因縁に依る轉生を信じた。少年が戰場の露と消えても、その靈魂わ流轉して尊い犠牲の功德により、遙かによい境遇に生れ返えると信仰していたから、身を輕んじ義を重んじて、それが爲め戰場の露と消えるならば、その時こそ來世に果報を受けると思い込んだ彼等に取り、少年を戰場に送ることわ少くしも非難のない善行であつた。果たして此の人生觀わ正しいであるわ。

左翼と右翼の勇敢な闘士も少年に犠牲となつて奮進せよと教える。もし人間が肉體のみの存在であり、死が人生の終局であれば、こおした態度を否定する大きな理由わない。よしまた基督教にゆう造物神の支配があるとしても、社會と人類の爲めに奮死するわ、地上に天國を作る神の意思でもあるわから、左翼と右翼の少年奮死者わ天國で神の右と左に坐われるであるわ。モハメッドも言う、アルラー神の爲めに死ぬ者わ天國で尊いものを受けらる。しかし人間生命と人間性の事實わ、かく少年をまでも犠牲に行かすことを果たして善行とするであるわ。

死が生命の終局であれば、その終局の死を急がし、少年にさえ偉大な最後の事業をさすわ善行である。右翼の人と左翼の人にわ、この程度の人生觀があり、少年に對してまで奮死を激勵する。彼等の人生觀わ生存に執着す

るにしても、その生存肉體の快樂を満足することであり、その快樂の満足が不安となり、また否定されると、生存よりも花々しい死を選ぶが、彼等にわ當然の結論となる。もし彼等が名譽心に誘われるならば、この結論を一層容易に到着される。

人生の終局が死であれば、その死を價值つけて、俗にゆう死に花を咲かそとするが人情となる。多くの人々の爲めに死ぬなら、謳歌されて死に花が咲く。こおした氣持ちを名譽心とも言う。肉體を遅かれ死に朽ちるからせめて名を後世に残せ。彪わ死して皮を残し、人わ死して名を残す。かく思もう氣持ちを名譽心とゆうのである。この名譽心を餘り多く持ちすぎると、人々から謳歌されることばかり考えて、人々の爲めになることを忘れだす。とかく名譽心わこおした方向に脱線しがちで、名譽心の強い者ほど人の評判ばかりを氣にし、なるだけ新聞の三面記事になるおと、ほんの浅い氣持ちで自分自身を返えり見ない生活をしている。

人々から謳歌されて善い評判を取るわ、人々の爲めをする結果である。原因を忘れて結果ばかりの名譽心が募ると、利巧になり過ぎた個人主義の小才子と同じく、誠に悪い臭いのするものである。もお彼れに眞の犠牲心など微塵もなく、彼れわ商賣上手に名譽ある善い評判を、成るべく安價に買わんとする。眞の犠牲心わ斷然と遠がう。

人生の終局が死であり、その死を價值つけて死に花を咲かす程度の氣まぐれで、果たして眞の犠牲に行かれるであろおか。價值ある死！ 死出の道づれに？ 愚か者よ、價值ある死とわ、眞に人々の爲めになることであり死を賭して人々の爲めに價值ある行ないをするにわ、輕い利己的な氣まぐれでなく、深く深く正義と人道を意識し、その爲めに力強い努力を續けねばならぬ。それわ苦難であり、死に花を咲かす程度に氣紛れな利己的判断からでわ、眞に貴とい苦難の犠牲を續けることわ不可能である。犠牲とわ正義と人道を實現するため、苦難の努力

に奮進することであり、この場合に生命を失なうか否かわ問題でない。昔から生わ難たく死わ易しと言う。死わ寧ろ苦難の努力が失敗した場合に甘受せねばならぬ結果であり、貴とい人生わ死の失敗を選ばず、苦難の人生を最有効に努力し抜いて、正義と人道を飽くまでも實現せねばならぬ。けれども死命観によつて人生を誤認させられた者わ、生存の方向に行き詰まると、そのとき安價な名譽心が誘うならば、容易に生命の犠牲に落ちる。

佛教にも基督教にも、また哲學にも死命観が秘むを述べた。最も徹底した死命観わ唯物論であり、人間を肉體のみの存在として、生命と意識の諸作用を、單に肉體の生理機能に過ぎぬと思ふが唯物論である。唯物論者わ人間を肉體のみの存在と思ふから、肉體の死わ即ち人生の終りであり、肉體人生五十年、その終局わ唯だ、死であるとおパーセントの判明さに、彼れら唯物論者わ死命観を意識するのである。

古い哲學者の唯物論わ、生命力と心理の諸活動を物の作用に歸せしめた。こおした主張わ哲學程度の想像で維持できなくなつた。科學者が彼等に代わり、新らしく唯物論を證明せんとした。解剖學と生理學が起つた初期に、獨逸の學者クツェルベやビヒネル等わ唯物論を新らしく唱えて、生命わもちろん肉體の生理作用であり、意識わ單純な感覺から複雑な良心の判斷まで、悉ごとく腦髓物質の生理作用だと主張した。けれども反省すれば生命作用の物理と意識作用の心理とわ全たく相違し、強いて心理の意識諸作用を腦髓物質の生理に過ぎぬと説明しよおとすると、例えば最も單純な感覺の心理作用が起るにわ、外界に刺戟の波動があり、その波動を目や耳等の肉體感覺器官が受け入れて、之を神經の導線により腦髓に運び、その腦髓の肉體物質が外界刺戟の波に共鳴する物理が、そのまゝ心理の感覺であると言うにわ、刺戟のある處に悉ごとく感覺その他の意識があるを承認せねばならなくなる。即ち風に揺れる松が枝も感じ、水に洗われる石も感じ、その風と、その水にさえ、刺戟の波が動く限り、宇宙萬物すべて物理と生理の波動がある處にわ、必らず感覺その他の意識作用がなければならぬ

結論となる。この結論に驚いて、クツォルベ等の主張者自身が唯物論を撤回し、物と力と心の三要素によつて世界が成り立つを改めて世間の人々に警告した。

理論物理學者が新らしく唯物論を唱える。力わ物の性能たと理論物理學者わゆう。原子を追究して電子にまで逆のばれば、電子わ物の構造原質であると同時に、力の起因する實質でもある。原子の構造を深く研究して理論物理學者わ、物と力を同一電子の表現だと主張する。生命もまた力であるから、この新らしい唯物論によつて、肉體の生理作用わ物理と遠くない肉體物質そのもの、働らきであるを受取り得る。だから人生を生命と見る程度でわ、人間を肉體のみの存在とする唯物論で満足し得る。けれども人間性の眞實を意識作用であると確認するとき、人間を肉體だけの存在と見る唯物論でわ理解ができない。物と力わ物理の両面であり、生理も物理と遠くない活動であるが、意識の心理わ物理でなく、また生理でもなく、完全に別の作用であるから、力や生命の生理を作用する肉體以外に、意識の心理を作用する人間實質を認めねばならなくなり、人間を肉體のみの存在と見る唯物論わ否定される。

けれども近代思想わ人間を叡智の意識者として受取るほど鋭敏でない。彼等の進んだ者でさえ、相互扶助や母性愛を人間性の最高なものと見る。その程度の思想にわ、人間性が肉體の本能以上に映らない。これら近代思想わみな唯物論であり、唯物論わ肉體だけを人間そのものとするから、肉體の死わ即ち人生の終了を意味し、従がつて唯物論わ死命觀の徹底したものである。この死命觀に徹底した唯物論が常識化すると、命の大安賣りとゆうほどの愚かな誤認識も發作するのである。

唯物論者わ肉體以外に人間の實質を認めないから、彼等に取り人生の終局わ死であり、死ぬまでの途中わ肉體欲望の快樂満足でしかない。だから快樂の満足が保證される間だわ生存する價值があるが、快樂の満足が覺束な

く、逆に苦痛が避け難くなれば、生存よりも死を選ぶを當然とする。もし自分の死に依つて多數の者が肉體欲望の快樂を満足し得る善い社會に近づくなら、自分の生命の犠牲わ社會と人類の爲め大きな寄與をすることになる。これぞ現代心理に於ける階級的な、或いわ人類的な、又たわ國粹的な、種々の運動に關係する人々が普通に持つ人生觀であり、唯物論としてわ最高な結論である。唯物論者が犠牲の行動に出る心理わ、まづ此の程度のものなのだ。

けれども靜觀すると彼等の心理にわ疑いがある。貧しくて快樂を獲得する希望のない者が、生命の自己犠牲を選ぶなら、その心理に少しの疑いもいらぬが、快樂を十分に満足しうる善い境遇の者が犠牲の方向に出るに付いてわ、唯物論で理解できない疑いが起こる。貧しくて合法手段で快樂が得られない者等わ、非法に快樂を貪ぶることもあるお。詐欺や強盜や強姦や、エロ・グロの方向に彼等が行くとして、唯物人生觀からわ決して之を罪惡と非難できない。反對に貧しい者が社會と人類の爲めに道連れでも作つて憤死するなら、それこそ謳歌される生命の自己犠牲であるおぞよ。だから貧窮兒が生命の犠牲を選ぶに付いてわ何にの疑いもないのである。しかし善い境遇の人々が自己犠牲にゆくならば、どおしても疑いが起こる。實さい自己犠牲の方向に進む多くの青年たちが、よい境遇の者であるを見ると、この疑問わ非常に深い。

唯物人生觀からでわ、肉體欲望の快樂を十分に満足しうる善い境遇の人々が、その快樂を振り捨て、生命の自己犠牲を選び得る筈がない。それわ唯物利害の必然が許さぬことであり、唯物人生觀の快樂主義者わ境遇が善ければ善いほど、愚かな恣慾に耽るわ世間の普通である。それにも拘わらず、右翼や左翼の奮死者に善い境遇の人々が多いのわ、それわ名譽心に誘われた結果でもあるおか。

彼等の或者わ名譽心からでもある。それならば彼等の行動わ斷じて犠牲でなく、名譽獲得の商賣をしたまで

ある。彼等の中かにわ英雄武勇傳の歴史に誘われて、革命病や反逆心の遊戯で安價に大きな名譽を買い取らんと商賣をした者もある。しかし純真な近代青年の心理を斯く解するわ、餘りにも皮相である。果たして生命の自己犠牲に行く者の心理は何にであらうか。

一たい犠牲が如何なる事情から始まつたのであるか。それわ宗教の迷信から始まつた。人間の運命を支配すると想像される神が、尊いものを犠牲にして祈ると、我等の罪を宥して福徳を授けると迷信した古代人わ、所有の中の尊いものを犠牲に捧げた。犠牲の迷信わ毒蛇えの人身供養となり、土工の基礎を固める人柱となり、海難のときに海の神の和らぎを求めため婦人を沈めた哀話さえある。今日でも南洋未開の部落にわ、最愛の赤子を神の犠牲に供える迷信が残る。生命の犠牲わ宗教の迷信から起つたのである。

神の怒りを和らげ、或わその甘心をかうために捧げる生命の犠牲わ、犠牲となる人に取つて非常に大きな損失であるが、しかし、それによつて多数の者が幸福を得られると思つた古代思想わ、近代倫理が最大多数者の最大幸福を説く功利主義者の心理と一致する。けれども新しい正義人道からわ功利主義が否定され、善良な何人をも犠牲とせず、全人類に最大の幸福を與えることを、最も新しい社會思想わ最善倫理の正義であり人道であると教える。

全人類に最大の幸福を與えることわ容易でない。他人を犠牲にすることわいけないが、自分を犠牲にすることわ宜いでないか。もし自分の持つ尊いもの、犠牲が全人類に最大の幸福を與えるなら、最善倫理の爲めに自分わ生命でも財産でも、まして時間や努力わ、その全部を犠牲としよぞ。誠に崇高であり悲壯でもあるこの決意わ、果たして唯物人生觀から説明し得るであらうか。

唯物論者わ思う、自分一個の利益わ小さく、最大多数者の最大利益わ大きいから、唯物論の數學で判断すれば

自分一個の小さい利益を犠牲として、必らず最大多数者の大きい利益にゆくであらう。なるほど、この判断わ當然な唯物論の機械數學と見える。それなら唯物論者わ、こおした機械數學から、果たして苦難の自己犠牲にゆくであらうか。

肉體人間の生理本能わ欲望の満足である。之わ唯物人間論の最根本をなし、之を否認すれば唯物人間論が解消する。唯物 人間論によれば、肉體人間わ欲望満足を本能の傾向として生きている。ゆえに最大多数者の最大利益が自分の欲望満足に一致する間だわ、唯物論わ滞りなく朗らかな喜びを覺えるが、自分の欲望満足と最大多数者の最大利益とが矛盾するとき、どちらの方にゆくに付いて迷いが起る。この場合に自分の欲望満足を捨てて最大多数者の最大利益にゆくと判断するなら、それが即ち自己犠牲であり、反對に最大多数者の最大利益に拘わらず自分の欲望満足をゆくと判断するなら、自己犠牲でなく、それこそ利己心の狭い個人主義である。唯物人間觀わ肉體欲望の満足を根本認識とするから、自分の利益と最大多数者の利益とが衝突する場合に、斷じて自己犠牲に行かすものであり得ない。

唯物人間論の根本わ肉體欲望の満足であるに拘わらず、機械數學の單純判断でわ、水が低きえ流れるに例外のない如く、誰れもが最大多数者の最大利益にゆくものならば、私わ決して唯物論を非難しない。事實に於て各人わ利益が衝突するとき、最大多数者の最大利益にゆかず、反對に殆んど例外なく最大多数者の最大利益を無視して、狭い自分の小さい私益に走る。資本家も労働者も、地主も小作人も、官吏も藝術家も、唯物人間論に立つ凡べての人が例外なく、狭い自分の小さい利益の方向え今現に走つてゐる。これわ事實であり、この事實が判然と目の前に見えてゐるので、機械數學の單純さで唯物論が狭い自分の小さい利益を犠牲とさし、大きな最大利益にゆかずとわ思い得ない。逆に唯物論わ肉體欲望の自己満足から、それに出發する凡べての人を自分勝手な狭い

利益打算に走らしている。肉體欲望の小さい利益を犠牲とすることよりも遙かに重い生命の犠牲を、断じて唯物論で理解できないのである。

造物の神があるならば、神の甘心を買い、天國の幸福を享ける爲めに、肉體の生命を犠牲とすることを理解できる。しかし、かくも無意味に生命の犠牲を喜ぶ鬼神や魔神や、それにも類した造物主なんぞ断然とある筈がない。少なくとも、左翼や右翼の犠牲に行く人々を、決してそんな迷信からでないこと確かである。彼等逆に唯物主義者であり、神と宗教の存在を否定さえる。

たゞ單純に正義人道の爲めに犠牲に進むことと尊い。しかし、たゞそれを崇高であるとか、悲壯であるとかと謳歌するだけでよいのか。かりに、それでよいとして、崇高や悲壯の感情の爲めに正義人道の犠牲に行くならば、それわ自己感情を満足する爲めでないのか。それなら、享樂にも似た心理であり、變態心理の者が他人を傷け或わ惨殺して痛快を感じる程度に、正義人道の爲めに自己を犠牲として崇高や悲壯の感情を覺え、その感情の中に唯物人生の自己を瞑目するのなら、之を外より批判すると、崇高でも悲壯でもなくなる。正義人道の爲めた犠牲にゆく者わ、果たしてどんな心理であるか。

唯物論の死命觀でわ、如何なる意味に於ても正義、人道の犠牲にゆく心理を理解することができない。或いは釋迦の說法に従がい個我を否定して、大宇宙の生命に返えるのだとも理解しよおか。然し、それにわ罪業の因縁となる煩惱を断ち切つて、木の枯れる如く、油盡きて火の消える如く、虛心の寂滅に大往生せねばならぬので、惡を憎み憤然と犠牲の死にゆく類の大執着があつてわ、七たび生れ戻つても、断然と大宇宙の生命に歸える死にわ入れない。或いはまた哲學者の言うが如く、宇宙の意思と生命の太源に返える其の死を、正義人道の爲めに役立つのだとも理解しよおか。例えば血盟團事件の判決を見ると、被告等わ宇宙全一の眞理を體得し自覺安心を

得たりと思ひ、人間わ差別相に於てわ分離對立したる存在なりと雖ども、其の本體に於てわ其のまゝ宇宙と一如合體したる存在なることを悟り、差別相に於ける自己のみに執着したる小我の生活を爲さず、自己わ此の身此のまゝ大衆なることを自覺し、大衆と苦樂を共にする大我の生活、即ち菩薩道に立脚する報恩感謝の生活を爲さざるべからずと觀じて奮立つたのである。しかし彼等の論理にわなほ飛躍がある。なぜなら肉體小我の生活を捨て、自然の死をも待たず、宇宙と一如合體しよおと哲學者の死に急ぐ途中で、大衆と苦樂を共にする報恩の感謝をするにわ、非常に大きな決断と努力をせねばならぬから、それに付いて、やはり別に深い理由がなければならぬのである。結局どんなに考えても、正義人道の爲め死にゆく生命の犠牲を、唯物論の徹底した死命觀からもまた、中途半端の思想や哲學の死命觀からも、決して理解し得るものでわない。犠牲にゆく彼等自身わ唯物的に判断したと思もおている。宇宙全一の唯物哲學から、確信を得たとも思もおている。しかし、その理由を追究すると答えができなくなる。彼等誠に氣毒である。彼等眞の人生を知らない。それでも、彼等に良心があり、その良心が實わ彼等を指圖して、彼等の唯物判断とわ反對な所へ行かした。それを彼等わ氣づかず、自分の頭に描がく唯物論から指導されると、單純で深い誤認識に落ちてゐる。良心こそ人間實質の現われであり、人間理學に依つて良心の人間實質が肉體以外にあるを知るならば、始めて凡べての疑がいが悉ごとく解決する。

キリストやフスワ單に自己の生命を犠牲としたが、右翼や左翼の闘士わ、自己よりも先きに他人の生命を犠牲とする。正義人道の爲めなら、それも止むを得ないであるか。單純な無抵抗主義わ正義人道でなく、正義人道の爲めならば、その妨害を排除する事が、それこそ正義人道の特權である。けれども、正義人道に名を借つて他人に無用な損害をかける事わ断然と惡い。眞に正義人道を實現する爲めに妨害となるものを、教えても諭しても退却せしめ得ないとき消滅さすわ、また有らゆる他の手段を盡しても遂に悉ごとくが無効であるとき、自己と

他人に生命の犠牲を忍受さすわ、誠に止むを得ないことである。その最大なものとして、闘争や戦争さえもある。凡べてわ人間性を確認して判明に答えねばならぬ。何によりもまづ人間性を確認しよおぞ。結局わ人間性のみが、凡べての問題を總解決する。崇高とか悲壯とか、それくらいの感情からでわ、断じて犠牲の方向に行けない。悪を憎む。それくらいのことでも、また犠牲の方向にゆけない。自分たちの幸福を圖る。その爲めにもし他人を犠牲にするならば、それこそ罪惡である。危害を避ける。眞にその必要が切迫するとき、始めて犠牲の方向に行ける。例えば人體に危害を興える蚤や虱やベスト菌わ、どんな慈善家でも殺す。もつと大きな危害を人類に興える原因があれば、それを除くわ止むを得ない正義人道である。しかし危害を避けることわ、まだまだ肉體生理の物理關係であつて、危害を直接に蒙むらない善い境遇の人々が正義人道の犠牲に行く心理わ、たゞ人間性の確認によつてのみ答えられる。明確に、その人間性を確認しよおぞ。

人間性わ容易に生命の犠牲にゆくを許さない。生命の犠牲にゆくわ眞に最後の止むを得ない場合であり、人間性わ有りと有らゆる方法で犠牲のない幸福を全人類に實現さそおとする。それを近代人わ誤認して、餘りにも容易に生命の犠牲を語り過ぎる。直接行動わ其れであり、闘争と革命と戦争わ大きな生命の犠牲である。

生命の犠牲を許し、それを合理つける爲め斯く言うのでわない。安價で輕率な生命の犠牲わ逆に罪惡であることを知らし、正義と人道の止むを得ない犠牲に行く前えに、あらゆる手段と方法の最善を盡くす使命があるを、人間性を確認するほど判明に認めるから、かく言うのである。

眞の犠牲わ肉體の生命に關するものよりも、更らに一層大きな苦難に耐える奮迅の先驅努力である。これわ人間性を確認するほど、人間理學に依つて判明となる。また犠牲に行く者わ誰れか。少年や修養途上の青年を犠牲に行かしてよいのか。肉體以外に存在する人間實質と、その人間性の確認のみが、凡べての疑惑を總解決する。

## 第五章 安心立命

犠牲と言へば、結果を思はず、たゞ損をすることだと解釋しうる。しかし机の上の觀念でなく、眞に犠牲の行動に出る人わ、たゞ損をするだけで満足せず、必らず犠牲に對して大きな結果を期待している。

犠牲の小さなものわ労働に始まる。その労働わ生産の爲めであり、徒勞の無駄であつてわならぬ。凡べての犠牲に付いても同じことであり、もし結果の期待がはづれ徒勞の犬死になるならば、それこそ遺憾千萬である。これ人間性の眞實が要求する偽わりのない告白なのだ。

遊戯なら、娛樂なら、徒勞でよい。いやいや、遊戯さえも、娛樂さえも、徒勞でわいけない。遊戯とわ、娛樂とわ、手段でなくて、動作そのものが目的の喜びである。面白くない徒勞でわ、遊戯や娛樂の喜びとならぬ。まして労働わ結果を求めての手段であり、動作そのものわ喜びでなくて、何にらかの必要な目的を遂げる手段である。労働以上に大きな、諸他の犠牲に付いてもまた同様である。

けれども、犠牲とゆう言葉を机の上の觀念でひねくり廻すと、單純な犠牲の損失とも言える。名譽もいらぬ、財産もいらぬ、命もいらぬと徹底したものが、眞の犠牲だとも言える。たゞ勇敢に武者ぶるいすることが、それこそ眞に偉大な犠牲であるとも、言葉の上えだけなら解釋できないことわない。

しかし、武士も血氣にはやる輕率な犬死にを戒しめた。大勇わ匹夫の小勇と違がう。大勇こそ眞の犠牲であり、



大勇わ小さな感情に囚われず、君國の爲め眞に必要な使命に役立ち、たとえ火のなか水の底にも飛び込む意氣である。斷じて犬死にでなく、その奮迅の犠牲によつて、君國の危難を救い、昔より忠臣義士と稱するほどのものが尊い犠牲の奮迅なのである。

忠臣義士わ決して名譽や財産の爲めでなく、命がけでたゞ純眞に必要な使命に奮進した。だから奸臣のために讒言されて恩賞に預からぬとも、よし逆くに責罰を蒙つても、決して君を怨むことをしなかつた。この意味で伊達政宗に斥けられた梁川庄八わ武士道を缺いでゐた。

講談本を読み、勇敢な梁川庄八を痛快に思おた。なぜ彼れを人傑政宗が斥けたか。それわ恐らく彼れが餘りにも私情に囚われ、大勇あると同時に匹夫の小勇に激し過ぎたからであつたに違がない。眞の大勇とわ菅公の心事にも似て、恩賞と責罰を考へるほかに置き、即ち名譽とか財産とか富貴とかを問題にせず命がけで、たゞ君國の危難に赴むことを言うのである。我が國の武士道わ之であり、この意味に於て栗山大膳にわ、たゞ大勇のみがあつた。

犬死にでわいけない。徒勞なら額に汗する勞働を、また明日もまた明日もと、毎日わ續け得ない。名譽の爲めでないけれども、財産の爲めでないけれども、額に汗し、或いわ一つしかない命を投げ出す犠牲わ、眞に必要が切迫して、また善い効果が期待されぬと悲しい。善い効果を期待していても、無効になることもある。それでも犠牲に行く者わ、自分の貴といふ努力によつて、君國の危難さえも避けられよと、大きな効果を期待する。今日に於て左翼や右翼の闘士もまた同じ氣持ちから、國と社會の爲めに奮起するのである。

神に捧げる犠牲も無駄でなくて、身に降りかゝる危難を避ける爲めであることが多い。そおでなければ、危難を避ける以上に、何にか大きな願ひごとの爲めに、貴といふものを犠牲とするのである。モハマッドも論じた。ア

ルラー神の爲めに死ぬる者わ、天國に於て大きなものを與えられる。天國に於ける永久生命を受けて、神の近くに坐わることこそ、基督を信する西歐人の、最も大きな願ひである。

知つたとき、我等に強い信念が起こる。知り得なければ、我等に信念が起こらない。犠牲の努力わ效果に對する強い信念あるに依つて、命を捨てゝも奮迅し出される。けれども犠牲の努力わ、必ずしも現實に效果を擧げず火の中かえ水の底にも入つて危難を救う冒險であるから、失敗に終わることが多い。命を投げ出す犠牲であり、萬一にも失敗すると、實に遺憾至極である。そこで安心立命の哲學と宗教が生まれた。

神に歸依すれば、死後の天國で大きなものを與えられる。これ多くの宗教に共通する信仰であり、どの宗教も之に類したことを説く。それわ現實に於て君國の危難を救い、社會と人類の爲めに盡すわ、火の中え水の水の底えも飛び込む冒險だから、千に一つの成功しか當てにならない。そのとき、梁川庄八よりも鋭く恩賞に對する私情を持つていてわ、一將功成つて萬骨枯れる不平の嘆息があるばかりだ。そんな狭い心でわ、眞に尊といふ犠牲に全努力を向けることができない。だから、モハマッドわアルラー神の爲めに戦死するなら、必らず天國に於て大きなものを與えられると、犠牲が決して無駄にならぬことを信仰させた。哲學と宗教わ、昔から之にも類したことを教える。この種類のことを概括して、安心立命とゆう。

見える世界わ誰れもが容易に知り得る。見えない世界を知るにわ、推論の秀いでた叡智の能力がなければならぬ。叡智の秀いでた能力を持つ者にわ哲學が安心立命を與え、それほどの能力を持たぬ者にわ宗教が安心立命を與える。釋迦の説教わ哲學に近く、基督やモハマッドの啓示わ單純な宗教である。その他にも幾多の安心立命論がある。

釋迦わ哲學にも似たものを説いたが、それを理解しうる者わ少数であつた。それで方便を設けて簡易に信仰さ

した。信仰こそ宗教であり、宗教の信仰とわ、知る理解力のない者に、啓示して安心立命を授けることである。宗教を知る理解力のない者に、啓示して信念を授ける。それなら宗教わ奇蹟であるまいか。いや、それわ人間普通の心理である。人わ信頼する者の言葉を疑わない。あの人の言うことなら、決して間違いないと、信用される人の言うことを、誰れもが疑がわず無條件で受け入れる。宗教と信仰わ、この心理に立つものである。釋迦の言うことわ、基督の言うことなら、モハメッドの言うことであるから、決して間違いでないと、哲學を理解する能力のない昔の民衆わ、無條件に教祖や聖人の説話に信頼した。通俗佛教の地獄極樂説や、基督教や回教の天國と永久生命わ、こおした信仰の味である。

地理學者わ地球の圓いことを教える。地球を一週してみない我等わ、地理學者の言うことなら間違いないと、經驗せず彼等を信頼し、地球の圓いことを受け入れる。物理學に付いても、解剖學に付いても、悉くの自然科學の知識わ、讀者に取り實わ信仰と大差のないものである。しかし科學を信仰とわ言わないが、自分の經驗を待たずに、信頼する人々の言葉を無條件に受取らすことに付いて、宗教と哲學と科學わ心理の基礎を共通にしている。宗教と哲學と科學わ、追究すれば同一の心理に立脚する。だから美教原書わ、知識わ悉くく假定であると大破した。今日太陽が東より出ることわ經驗し得るが、明日太陽が東より出ることを、果たして假定でないと云いうるのか。知識わ悉くく假定である。それでも科學の知識でわ假定が想像に立脚せず、過去に於ける例外的な經驗の一致に根據する。過去に於て經驗が例外なく一致すると、我等人間性の心理わ、決して疑わす同じ出來事を未來にも期待する。この期待を知識と言ひ、科學の知識わ例外的な過去の經驗を基礎とするものである。凡べての人わ科學者であり、また科學者でない。我等わ悉くくこのことを經驗することわできない。それゆえ自分の信頼する人の言うことを疑わすに受取る。科學者わ例外的な經驗を基礎にして我等に教える。その教科

書を精讀して無條件に信仰する者を、また我等わ科學者と言うを妨げない。我等もまた此の意味に於て科學者である。宗教や哲學を科學のない以前に信仰した心理も全たく同じであり、我等わ科學以前に宗教家や哲學者無條件に信頼するを餘儀なくされた。宗教家わ安心立命を説いた。哲學者も安心立命を説いた。科學者もまた安心立命を説かねばならぬ。知り得る者にわ教えよ。知る故に深く信するのだ。知つて信する力こそ、最も強い信仰の信念であり、單に他人の言葉を信する程度でわ、強い信念の努力が起ころぬ。知り得る者にわ、由らす以上に教えて知らさねばならない。

勞働よりも大きな生命の最大犠牲が無駄であつてわならぬ。けれども現實に於て、犠牲の努力が確實に期待の結果を擧げることわ少ない。犠牲の努力が遠大であるほど、益々效果わ容易に擧がらない。そこで安心立命と、或いわそれに代わるものが必要となつて來る。

もし地獄と極樂があるなら、よし前世の悪い因縁によつて、極樂に行かれぬまでも、地獄でない淨土の入口ぐらに行かれるものなら、悪いことわ慎しみ、生命の犠牲にも喜んで奮迅するであらう。君國の危難に赴むくことであるから、矢彈に當たつて脆くも仆れ、だからと言つて、恩賞を子孫に残すほどの功勞を立てず、我れ亡きのちに妻子え苦勞をかけることであるが、もし危難に赴く犠牲心が因縁となり、我れわもちろん我れの妻子さえも淨土に近い處へ行かれるものなら、かよおに通俗佛教が説くを眞に信仰すれば、喜んで生命の犠牲にゆさう。またもし何時も善行を積んで置けば、突然と病氣や災厄に罹つても、日頃の善行が因縁となり、淨土の入口に行けるものなら、善男子も善女子も財産の一部を獻げるくらいのことを何んでもない犠牲と思ひ、寄附や供養の特志も起ころお。天理教や大本教に歸依する人の心わ之に近い。

善行の因縁に依つての故に、淨土と其の入口に行けることわ疑わしくなつた。釋迦の教えでわあるが、親鸞や

日蓮の説教であるが、どおも疑がわしくなつた。一たい極樂浄土が何處にあるのか。經文にわ西方十億萬土と書いてあるが、丸い地球の上を十億萬土の西に行ける筈でない。たゞそれだけでも、佛教の僧侶だちが嘘を言う。一つでも嘘を言う彼等を、もお無條件に信じないぞ。疑がえば一たい因縁なぞと言うものが有るのであるか。もし因縁が有るのなら、此の世わ前の世の因縁であり、無限に遠い過去の大きな罪わ未來に及んで容易に盡きないから、此の世で少し善いことをしたくらいで、悪因縁の爲め貧乏人に生れた者が、來世に浄土の極樂へ行かれる筈でない。反對に善い因縁の爲め資本家や特權階級に生まれた者わだいぶん惡い掙取をしても、來世にまた善い處に生れるであらう。大嘘八百！ そんな因縁など有つてたまるものか。宗教わ阿片である。もお今日佛教わ大衆に安心立命を與えず、逆に墮落と搾取の罪惡を寛容する阿片となつた。今日佛教わ遂に消極無能に墮落し、正義人道を知つて犠牲の努力に行く者わ、新しい基督教に安心立命を求めだした。

十字架を背負う氣持ちで力強く正義と人道の爲めに努力するなら、父なる神わ之を喜んで肉體の死後に天國の永久生命を授ける。金持ちの息子わ財産を賣り拂り貧乏人に施して我れに付いて來い。これぞ基督教の精髓であり、佛教の消極と無能に失望した青年だちわ、新しい基督教に依つて痛快な安心立命を見出した。だから頭腦のよい青年だちわ、我れも我れも基督教會の門を潜つたのである。しかし今頃わ聰明な青年だち、教會に行くを阿片でも吸うほどに嫌らいたし、左翼と右翼の唯物主義と其の思想え、新しい彼等の使命感が燃えだした。

佛教の如く基督教の説くところも疑わしくなつた。基督の時代に於てさえ、時代の人わ證しを求めた。基督わ病人を立たし、パンを殖やしなぞして證しを示した。證しこそ證據であり、證據とわ理學にゆう證明のことである。證明なら、理學者の實驗と推論が確實である。病人を治し、パンを殖やす奇蹟を現實に示すならばともかく

も、それさえできぬ今日の基督教わ、神の存在を啓示する證しを失ない、例えば翼を無くした鳥の如く地に落ちて、近代唯物思想が主義と運動の王座を取つた。それもその筈である。自然科学わ造物神のあり得ぬことを證明するので、造物の神がなければ、十字架を背負う犠牲をしても、基督教わ天國の永久生命を與え得ない。純眞な青年だちわ基督教に失望して、別の處え安心立命を求めだした。

迷える青年だちわ名譽を思い返えしてもみた。しかし名譽でわ餘りにも汚なくなり過ぎる。一將功なつて萬骨枯れる、その一將にならおと争そを、純眞な青年だちわ氣持ちよく感じ得るのであるか。封建時代の名將わ恩賞を誤まらず、名譽の功名心わ其の時代の青年だちに一種の安心立命を與えたが、正義人道の犠牲を公平に恩賞する裁判官わ居らぬので、今日でわもお名譽心や功名心で純眞な青年の氣持ちを引き締めることが出来なくなつた。青年わ主義や思想の哲學書を読み耽る。けれども釋迦の説法にも似た唯心哲學や、また不徹底な唯物哲學でわもお青年の意識が緊張しない。いま彼等の意識を緊張さしているものわ、徹底した左翼の唯物論である。

好意を以つて左翼唯物論を注釋すれば、こおである。人生五十年、人間わ肉體のみの存在であり、肉體死後に地獄や極樂や浄土の天國わなく、たゞ地上の現實社會があるだけだ。しかるに現實社會わ資本主義の行詰まりから、安定と幸福がなくなり、大衆と全人類わ窮乏の總疲弊にまで大搾取を受けている。待つて益々深刻に落ちゆく苦しみの運命に翫弄されるより、立つて時代を革新する犠牲に向かおおぞ。唯物史觀が教える處によれば、資本主義わ爛熟して將に没落せんとしている。それを崩壊さして全人類のために、安定と幸福を獲得しよおぞ。立て、熱血に燃える青年よ。しかし、それわ虎穴に入つて虎兒を求めるといふ冒険であるから、死を覺悟して立て。もし虎に嚙まれて犠牲となるなら、その犠牲が大きなショックを社會に與えて、同志と民衆わ續々と憤起し、決して汝等の犠牲を無駄の犬死にわさぬぞ。立て、熱血に燃えて青年よ。搾取なき新社會の大改造に、犠牲とな

つて奮起せよ。之が最も好意を以つて注釋した唯物人生觀であり、この程度に注釋せぬと、好い境遇に生まれながらも犠牲に行く者の心理を、唯物論から説明できない。

純真な青年は左翼の理論と文藝を研究し、他にそれ以上のものを見付け得ず、彼等わそれを唯一の眞理の社會科學でもあると輕信して、唯物史觀と辯證法に依り、成るべく死なない程度に、生き残つて資本主義崩壊後の新社會を享樂する果報を、虎穴に入つて虎兒を取る夢に見つ、冒險な運動に潛行している。この左翼理論を正しであるか。

左翼理論の悉ごとくを總誤謬である。釋迦と基督の言うことが誤謬である如く、左翼理論の悉ごとくも總誤謬である。誤謬でわいけない。誤謬を信念に持つわ、よし社會科學の名を借用しても、斷然と迷信である。私わ左翼理論の總誤謬を經濟學確證と資本論嚴正批判に於て暴露した。

左翼理論の悉ごとくを誤謬である。誤謬を氣付けば、純真な青年だちわ、純真であるほど左翼理論のために戦う氣力が抜ける。信念がなくなると轉向せねばならぬ。いま轉向の大流行だ。

左翼理論にわ冒險がある。唯物史觀わ資本主義制度が行詰まり、將に瓦壞せんとしていると教える。それなら自然に瓦壞するを待ち、その後を生れる新社會を統制し、その安定と幸福を享樂しよおぞ。インテリ・マルキストわ斯くも唯物主義の功利心を持つていて、労働者よ農民よ、前衛となつて進め進めとけしかける。彼等わ潛行し、冒險の犠牲を少なくして、善い子になろおとする。それでも見付ければ、冒險であるに違いない。

冒險でわいけない。見付かつて終身の牢獄が約束されるとき、唯物死命觀の彼等が、本心か噓心かで轉向するわ尤ともである。唯物觀だもの、肉體の幸福を享樂するために、轉向と進出と、それわた手段だけの相違だ。即時轉向、少こしも愧ぢない。けれども、思えば氣毒なことである。

冒險でわいけない。見付かつて本統に犠牲となるなら、彼等わ泣くにも泣けない悲しみか怒りかを感じる。犬死にだ。全たく絶望の犬死にだ。しかし、同志と大衆わ俺たちの犠牲によつて激勵を感じ、俺だちを無駄な犬死にわさせぬであろおぞ。そんな程度の慰めで、どおして唯物功利主義を固持し得るものぞ。思えば氣毒なことである。よし同志と大衆が激勵を感じ、それによつて安定と幸福な社會が出現した處で、その幸福わ亡びゆく犠牲者に全たく無價値である。左翼の犠牲者わ無駄な犬死にでなくても、彼れ自身に取り全たく徒勞の冒險であつた。許して欲しい、許されることなら、即時に轉向します。左翼理論を輸入した家元の某博士まで、淋しい轉向をしたのである。

確信のない冒險の安心立命、そんなもので純真な青年が満足し得る苦わない。いま青年わ堅い安心立命の信念を求めている。人間學のみが、この堅い安心立命の信念を與える。

虚偽でわいけない。事實でなければならぬ。事實こそ眞理であり、事實のみが眞理なのだ。その眞理の事實に立脚して、人間學わ人間それ自身の實質と、その人間性を判明にし、少こしの冒險もない自己完成を確實に説く。自分自身の人間實質を完成した者わ純美純愛純眞の永久生命を大宇宙に解脱して無限に續ける。肉體を解脱したのであるから、も何んの缺乏も覺えない。全たく自由であり、眞に平等であり、至高至上、全智全能、最善充滿、能動藝術の生活を、大宇宙の無限に續けるのである。

顧みれば肉體生活に、絶えず安定と幸福が享樂されても、肉體わ動けばなおさら、靜坐していても刻々に缺乏を感じるから、肉體の快樂わ缺乏と不安の満足でしかない。即ちプラスとマイナスと差引きゼロなのが、肉體生活の安定と幸福である。けれども人間實質の自己完成者わ、肉體を超越した絶對人であるから、心に缺乏と不快の殘滓を濁さず、物質を欲望する功利主義の一切から解放されて、大宇宙の森羅萬象に對してわた純粋に美

を感じ、解脱した人間實質相互間にわたる純粹に愛を感じ、悉ごとくを直観して疑問がないから絶対の眞理に徹底して全智であり、手足の疲労がなく飛行自在であるから自由な随意の全能である。その意識が客觀全體と主觀全體に擴がつて何時も最善に充滿して、それかと言うて天地間にわ勝手と横暴を極める造物主や、善惡と禍福を主宰する神がないから、我等を決して僕でなく、唯我獨尊の至高至上な、進化の頂上にある超越者の完成人である。これぞ人間理學の確認する大信念であり、肉體の社會生活期間に犠牲の鍛錬をして自己を完成する者わ少こしの冒險なしに人生の目的を遂げ、肉體に宿る人間實質の自己が完成に近づくに従が、人間性の普遍意識が透明に現われて、人類と其の社會を我等の人間性と同じ方向に純美純愛純眞の生活環境に淨化せんと希望する。これ完成者の性質が抑え難く現われる事實であり、肉體生命の犠牲など、も少こしも問題でなくなる。一日も早くこの自己完成に到着し、續いて自己の如く世界と全人類をも完成に導こおぞ。

自己を失なえば、世界を得ても益がない。安定と幸福の生存權を主張する左翼と右翼の人々よ。冒險でない自己を確實に握れ。眞の人間實質の自己わ肉體のほかには在り、肉體わ人生五十年、脆くも細菌に食われて病死するが、肉體生活の間だに自己を完成する者わ、人間實質を固めて永久の生命を續ける。

人間實質の自己を諦観すれば、我等が自己を完成するほど、我等の人間性わ功利心でなく、純美純愛純眞の良心であるを知る。自己完成者にわ此の良心の人間性が燃え、犠牲に拘わらず正義と人道を國々と世界に實現しようと思ふ。これぞ十字架を背負う苦難であり、人間性が厭わす此の苦難に赴くころ、自己が完成されたを知るのである。自己が完成すれば、肉體の生命以外に人間實質の永久生命が固定するので、我等わ犠牲を犠牲と思わなくなり、君國のためにも全人類のためにも、遺憾なく奮迅することができた。既に自己が完成し、その性格が現われて奮迅するのであるから、水が低きえ流れると同じ自性の傾向より眞理と最善を見つめ、その爲めに肉體

を犠牲とするならば、人間實質の自己に取り損でもなんでもないことである。もお犠牲なんか、少しも遺憾でない。だから人間理學によつて信念つけられた者にわ動搖がなく、彼等わ犠牲に拘わらず奮迅するけれども、決して冒險と轉向を知らない。彼れわたる自性のまゝに水が低きえ流れる如く、活動して最有效に奮迅するのである。造物の神がなくても、大宇宙に天國があれば、十字架を背負う犠牲の努力に奮迅する者にわ、その天國の永久生命が約束されるであらう。げにその通りである。造物の神わない。しかし大宇宙の天國わある。之わ事實であり、この事實を人間理學わ明確に知らず。いざ、果たして肉體のほかには人間實質があるか、まづ之より確實に究明しよおぞ。

安心立命わ生命の犠牲に突進する者だけでなく、危難や病氣わ突然と襲來することであるから、消極的にたゞ坐わる者でも、人間の誰れもが安心立命の人生觀を求めている。まじめに讀書する者わ鋭敏な意識者であり、進んで犠牲に奮迅するであらう。彼等の爲めに生命の犠牲を述べた。しかし、それほどの意識がない大衆も、やはり安心立命の信念を求めている。犠牲に奮迅する意識者よ、大衆の爲め人間理學を平易に説いて、安心立命の信念を知らそおぞ。

信念を持たず死にゆく人わ氣毒である。自己完成に達しない、けれども生死に悩む年頃ともなつた青年男女が難病で死にゆく臨終に立會うならば、なんと哀れな姿を見ることよ。死わ突然と來る。いつ死の運命に遭遇しても、なんの哀れを見せない大往生の信念に、一刻も早く我等わ自己を完成しよおぞ。これ人生の最大な修養であり、この爲めに正しい信念の啓蒙と理解を、全人類に徹底さゝねばならぬ。人間理學美教原書わ、安心立命の本統のものを授ける經典であるが、難解のゆえに本書で詳細を説明する。

信  
念  
篇

信念を受け得ない。心に強く芽生えたもののみが信念である。しかし、獨りで勝手に芽生えるなら、雑草にも似た價値のない獨斷の偏見となる。

信念がなければならぬ。しかし、獨斷觀念の偏見に落ちず、事實を判つきりと確かめて、誤解と動搖のない認識が、人生の指針となる信念である。

信念わ人間實質と人間性の確認から、意識に強く成長する。篇を重ねるに従がい、本書わ必ず不動の信念を成長さすであらう。けれども、誤認識を抱き、色眼鏡をかけていてわ、本統のものが本當に見えない。本篇わ廣く蔓こる誤認識の雑草を刈りつゝ、本統のことを本當に見る信念の方向を定めるであらう。

## 第六章 肉體の生命力

信念がない者わ氣毒である。信念がなければ動けず、信念ある者ばかりが活潑に動き、信念のない者を指導する。信念わ生命であり、活動の源泉である。心から生命の犠牲に進む人々わ強い信念を持ち、肉體の生命以上に大きな人生と、その意義を認めている。

信念のない者わ動けない。彼等わたゞ肉體生存の必要から促がされて、動くと言ふものの、大儀ぞおに仕方なく動いている。食うために動き、着るために動き、子供を育てるために動き、信念のない者等わ、肉體生存の必要から促がされて、仕方なしでしか動かない。もし肉體の必要が促がさなければ、彼等わ石地藏の如く、外とに追い出されても動かす立つていないであらう。

石地藏にも似て信念のない彼等、しかし彼等には肉體の成長に従がい猛烈な欲望が起こるから、とても鋭く動きだす。犬よりも猫よりも鋭く動きだす。彼等わ食ほり、食うにも美味を求め、着るにも美衣を纏い、立派な家を建て、講談小説を読み、歡樂場に入入りし、そおしたことに必要な財源を得るため、商工業の金儲けに奔走し彼等わ他の生物に見ない活動をする。それを彼等わ人生の意義とも思う。

愚か者よ。彼等わ結局たゞ肉體の缺乏を満足したゞけである。マイナスを補なうプラスを如何に多くしても、差引きゼロであるのが、彼等の愚かな活動であつた。顧みて剩餘ある本統の人生の意義を見つめよおぞ。

信念がなければ動けない。だから信念のない者等わ神や佛を信仰し、宗教の殿堂に拜んで信念にも似たものを求める。しかし宗教はいま何にをしているのか。石地蔵の如く往來の邪魔になるのが、現代の宗教とその殿堂である。大擗取をする天理教その他の新興宗教や、擗取さえも出来なくなつて蜘蛛張りの伽藍に籠る古い葬式屋ども、全たく信念のない滅びゆく存在が宗教である。彼等に信念を買いに行けば、彼等わ職業服を取り出して急に莊嚴を作り、意味の徹底しない繰り言で欺く。

欺く者に信念がないが、欺かれる者わ信念を受けて、病氣が治ることもある。房州の名勝地、仁右衛門島の平野老人わ私の縁家であるが、老人ゆう。自分の村に奇態な婆さんがいて、豆と大豆は一斗三升五合と唱え、病人の悪い處を摩すると、不思議に病氣が治る。あの婆、なんにも知らぬのに、あまり怪しいから、自分も現場を一度見に行つたが、来る来る病人が来る。婆さん手を出して病人の痛い處を摩すりながら、豆と大豆わ一斗三升五合を唱えていると、病人顔色から善くなり、いざりが歩くほどでわないが、不思議に治るわい。益々怪しいから村の醫者と理由を研究してみると、こおなのだ。婆さん何にも知らぬから、眞言宗の寺で南無大師遍照金剛と唱えるのを聞き違えて、豆と大豆わ一斗三升五合とやるのだ。それでも信仰わ不思議なもので、治るわい、治るわい、實さい治るのである。鯛の頭も信心とゆうが、全たくその通りである。

信じさす者に信念がないが、信する者に信念が付く。濱口熊嶽とゆう不思議な人物が萬病を必らず治すと言うので、どんなことをするかと、私も一度彼の前に坐つてみた。私にわ厄介な痔病があつた。まあまああえ、手を上げるだけで、次ぎ次ぎと彼れわゆう。それでも治ると見えて、病人が来ることを來ること。馬鹿々々しい。私の痔病わ少しも善くならず、病院で切開治療を受けて根治した。その代わり入院料を二十日間で二百圓取られた。二十日の入院に二百圓いるから、豆と大豆の婆さんや、熊嶽君等が繁昌するも無理わない。天理教も繁昌すれば、灸點師や、そこらの御祈禱屋まで繁昌する。治す方に信念がないが、治る方に信念がつく。

それでも熊嶽君わ信念のあるらしい大風呂敷を擴げる。まあまああえをやる前に、來ただけの患者を集めて彼れの偉大さを一席辯じ立て、すつかり一同を催眠術にかけて置いて、それから最大特急の、まあまああえで、順繰りに何んの雜作もなく片づける。實わ熊嶽君が治さず、熊嶽君を信する信仰が治すのである。バイブルで基督わ幾回もゆう、汝の信なんちを救えり。灸點師の中にも新らしいのわ、國民皆醫とか何んとか宣傳して置いて、それから灸をすえる。治ること治ること、ほんとによく治るそおである。

また、こおゆう話がある。いま川崎造船所の社長をしている平生鈺三郎氏が、特殊な診療病院を立てる準備に醫師を養成した。その一人が仙臺の醫科大學に學んでいた。その學生自分で肺病に罹り、時々悲觀した手紙をよこす。平生氏最後に烈しく激勵して、人を治す醫術を研究する者が何事だ、自分の病氣くらい治せぬのか。その手紙わ強すぎた。その學生まつたく閉口し、しかし非常な激勵を感じて發憤し、なんだ、死ぬなら死ぬ、それから薬も飲まず、たゞ一心に讀書の勉強をした處が、いつの間にか肺病が全快した。

また、こんなこともある。美教に一番早く共感した山形縣鶴岡市の少壯名醫星川清躬氏わ、注射によつて結核菌を全滅し、三期の肺患者でも九十パーセントまでわ治している。基督教會の長老をしている人が肺病となり、信仰の力で治そおとしたが中々治らない。三期にまで進み血を吐出した。星川氏わ基督教の造物主を否認するの、心から基督教の造物主を信仰する氣毒な長老わ、自分からわ星川醫院に行けな。人を頼み、それとなく星川氏が病氣見舞の往診に來るよおに話して貰つた。星川氏わ治してやりたいが、治れば神様が治して呉れたと言うに決つている、造物主でなく、病氣わ醫師が治すと心から科學の前に跪くなら、何時でも治療の見舞にゆくと言つた。それを聞いた長老、愈々もお最後だ、星川氏に來て貰らうことわ絶望だ。死ぬ、神様よ、殺すも活



かすも御心のまゝにと、哀れな長老わ涙を流し身震いして、それ以来、夜となく晝となく、熱心に燃える感激で祈りつゞけた。ところが、次第によくなり、血を吐く三期の肺病が全治したとゆうことである。

信仰わ病氣を治す。この意味に於てなら、天理教でも金光教でも病氣を治し得る。しかし天理教や金光教が病氣を治すのでなくて、實わ信する者の信仰が病氣を治すのである。熊嶽君も病氣を治し、平生氏の手紙と星川氏の警告も肺病を治した。國民皆醫の灸術も種々な病氣を治す。それわ、こおである。凡べて病氣わ身體細胞の生活力が衰えるから起るので、例えば灸で悪い處の身體細胞を刺戟すると、その生活力を盛にし、そのとき精神的に治ると強く信仰するなら、全身細胞も大きな刺戟を受けて、内分泌その他の生活力が盛となり、實わ灸よりもその方の刺戟が却つて病氣を治すことになる。だから非常な激動わ強い信念を促すに役立ち、身體細胞の活動を盛にして、病氣を治す結果ともなるのである。

私の身體わ貧弱であるのに、また私わ疲弊した百姓の粗食をしているのに、殆んど病氣をしたことがない。餘り忙しいので、實わ病氣をする閑がないのである。實さい大きな責任を負い何時も非常に忙しいので、全身が緊張して私の生活細胞わ總動員で活き活きしている。それを、はつきりと私の内感覺が認めるほど、私わ何時も緊張して活き活きし、年中無病息災で威勢よく活動している。それなら誰れでも自分を自分で激勵し、誰れもが年中無病息災でいられるのか。

觀念から自分を自分で勵ましてみても無効である。社會に對しまた人類に對し非常に重い責任を負う現實の境遇に自分を置いて、自分が奮然と緊張して犠牲の大努力をせねばならぬ關係から一日も抜けられなくなると、誰れもが始めて本統に自分を自分で激勵し、病菌も寄り付けない緊張が毛髮の先から手足の尖端にまで徹底する。かくも重大な公共の責任に自己を見出した者わ幸でないのか。げに私わ寸暇なく多忙であるが、それに感激して

私わ誠に幸福であると思う。反對にもし私が時間の使いよおがない暇に置かれていたなら、貧弱な私の身體わ昔昔病菌に食い殺されていたであろう。げに緊張して忙しい私わ幸わいである。どんなに過重な負擔も私にわ決して犠牲と感じられず、私の生命と健康わ忙がしいことからの剩餘である。

重い責任の使命觀を感じない者わ緊張することができない。人生の大きな意義を發見しない者わ、鍛錬と修養と、また人間性を見詰めての人類に對する寄與の自己激勵を受けて奮迅することができない。彼等を無自覺者と、また彼等わたゞ肉體生存の必要に促がされて食いつ着る程度に働らき、鋭敏な犬よりわ僅かに鋭く、プラスとマイナスがゼロとなるほどの生活をしている。自信のない彼等わ本願寺や日蓮寺や基督教や天理教や金光教やまたわそこらの流行り神様と、新らしくもない思想の書籍などから、何にらかの信念を買い求め、病氣も治し相場も張り、善い事と悪い事と突きまぜて、ともかくも右か左か西か東え、自信のあるらしい行動をしている。この意味で彼等にわ信仰が必要であり、信仰を持つことによつて、彼等わ病氣と闘かい、處世の暗礁も突破しうる。しかし思えば愚かなことである。人間理學のみわ決して愚かな迷信を投けず、反對に尊とい人生の意義を發見させて、私の如く重い責任の使命觀から強い信念に燃え、忙がしい肉體に病氣わなく、何時も元氣で社會と人生のために大活動をさす。本統に鞏固な信念と激勵を、人間理學に依つて受け取る者わ幸わいである。

人間理學わ迷信の一グラムも説かない。それでも強い信念を授けて、プラスとマイナス以上の意義ある生活をさす。人間理學わ人間自身の實質を確認さして人間性を完成せしめ、眞に永久不死の絶對人とする。美教者わ二十幾歳で人間實質の自己を完成し、その後わ非常に大きな世界と全人類に對する使命の責任を感じて、肉體と時間と努力の全生命を犠牲とし、餘生を何等の遺憾もなく貴とい大奮迅に捧げて寄與する。もちろん病氣なんかする閑がなく、神や佛を祈るも愚かな時間の空費であり、美教者わ時間と努力の全部を最有効に役立てて、肉體細

胞の全部が活潑に躍動している。眞に人間學を確認して、貴とい人生の大使命に奮迅する者わ幸わいである。

安價な他力本願や唯物幸福観くらいでわ、人生わプラスとマイナスのゼロにしかならない。人間學わ肉體の外に人間實質が存在するを確證し、人間性の自己完成を判明に知らず。これぞ人生の最も大きな意義であり、我等わ人生の大きな意義を知ることによつて、始めて信念のある生活と、力強い犠牲の活動をすることが出来る。

正しい信念を持つ者わ幸わいである。無病健康で、行ないわ規範に従がい、眞理と最善を日常の生活に現わして、自己完成の永久生命が光り輝く。げに永久不死の人間實質を正しい信念に確認する者わ幸わいである。

肉體以外に人間實質があるを證明するにわ、まづ肉體とその生命力の何にであるかを知らねばならぬ。肉體わ無数の細胞から成る。或る學者わ肉體細胞の数を六十兆と計算した。ともかくも無数の細胞から肉體わ成るのである。しからば、その肉體わ如何なる事をするのか。肉體わ物理の働きをする。それにつれてエネルギーを消耗し缺乏が我等に起こる。また肉體の組織する細胞わ化學作用を營なむ。生命力とわ之を言う。

物理の働作と化學の生命活動わ、肉體能力の現われとして、理學に依り説明しうる。その外かに我等人間にわ意識の心理活動がある。之だけわ物理や化學からの肉體作用であるを、如何なる理學に依つても説明できない。そこから肉體以外に人間の實質が存在するを承認せねばならなくなる。まづ肉體作用の生命力より理解しよお。

筋肉の諸動作が物理の法則に従がうことに付いて、少しの説明も必要があるまい。歩行し、勞働し、發音し、これらわ悉く肉體の物理作用であり、それらの諸活動は筋肉や骨やの機械作用であることを、理學わ十分に説明して呉れる。呼吸や血液の循環等に付いてもまた同様である。

しかし榮養に關する胃や腸や、其の他の雜多な内臓と腺類の作用になると、物理學でわ説明し切れず、化學からでも容易に了解されない。細胞學や組織學の新しい研究が起こつたが、それでも説明わ困難である。最近に

生體化學が發達し、やつとのことで説明が付きかけた。

肉體を構成するものわ、言うまでもなく細胞である。その細胞に付き生體化學者わ言う。

「細胞の構造を詳しく調べるならば、それわ唯一種のものから成るのでわなくして、三種の構造物が集合し且つ重り合うと考えられることに氣付く。即ち顯微鏡的のもの、限外顯微鏡的のもの、及び原子的のもの三つである。第一のものわ細胞を數部に分割するのに相當する。即ち細胞膜、原形質、空胞、及び可なり複雑で各細胞に就き異なる獨特の構造の核の如きである。之わ組織學の研究に依つて發見せられるところのものであるが、……但し之わ吾人の顯微鏡が不完全である爲めに事實わ組織學が示すよりも恐らく更らに緻密なものである事わ念頭に置かねばならぬ。吾人の顯微鏡わ、耗の一〇、〇〇〇分の若干以下の細部を見る事が出来ぬ。」第二の物わ之程に知られていない。殊にそれわ知られてから時日も浅いのである。吾人わ既に生命を有する物質の大部分がコロイドであり、且つ此のコロイドわ其の構成要素が通常の化學分子でわなく、ミセルである點で他のものと區別せられることを見た。(ミセルと言うわ有機體の分子の如く特別に構造が複雑で大きな分子のこと、そおした分子から成るものをコロイドと言う)ミセルわ著しい數(通常數千)の原子の集合であり、此の集合わ通常の分子より遙かに大なるものであつて、可なり異なつた性質を有する。此のミセルわ限外顯微鏡的である。即ち極めて小なる、屢々顯微鏡が見得せしめるよりも遙かに小さい直徑しか有せぬ爲めに顯微鏡でわ見えぬが、限外顯微鏡と呼ばれる顯微鏡に改良を施した機械でわ見る事が出来るのである。細胞の最も細かい組織學的要素(其の大いさわ)・〇〇〇一又わ〇・〇〇〇〇五耗以下のものでわない)も更らに可なりの數——恐らく工場の煙突の煉瓦の數位——のミセルから成つていて、此のミセルわ余が限外顯微鏡

的構築と呼んだところの型で排列せられているのである。」

「最後にミセルそれ自身も或る秩序に基づいて排列せられた原子の集合であり、其の秩序や原子の數わ一定でわなく、従つて同一物質より成る凡べてのミセルわ大きさや構造や性質が必らずしも同じでわない。……」

「此の構成わ全體として種別的で遺傳的なものである。一方其の要素たる原子わ生物でも又た最も不活性の無機物でも同じであつて毫も種別性を持つていないのであるから、種別性と遺傳性とわ何の點迄吾人が追究し得るか、即ち此等の性質わ上の三種の構築の何れか一つに、それとも其の全部に依存しているものであるおかの疑問が生ずる。……」

「ミセルの性質わ實に一定していない。同一の物質より出來た、併しながら大きい異なるところの二つのミセルわ同じ様に振舞わぬが故に、ミセルの性質わ確かにそれを形作る物質に依るのみならず、その大きさにも關係するのである。更らに……ミセルと接している凡べての物質の性状にも影響される。即ち例えば純水中に在る場合と塩類溶液中に在る場合とわ全く同一でない。……最後にその性質わミセルが作られたところの方法に依つても異なるのである。」

「要之、同一の操作を用いるに非ずんば、同一のミセルにわ達せられないのである。従がつて生きている生物のコロイドにとつて一つの特種なる性質が出來るとゆう結果になる。即ち一定の細胞の中に極めて特殊の條件の下で生じたミセルわ、他の或いわ人工的の或い又た異なる種類他の生物體から抽出したところのミセルが持ち得ぬ如き一定の性質を有する。同様にして其の集合の様式も各箇に定まつたもので、即ちその組織わ或る秩序で重り合つたミセルから成り、その秩序わそれを作つた細胞以外でわ實現し得ぬのである。それ故限外顯微鏡構築と原子的構造とわ二つながら種別的で且つ遺傳的である。而して若し或る單細胞生物とその子

孫の系統凡べてとを考ふるならば、それ等の凡べてのもの、ミセルや組織わ著しく同一な條件の下に常に同一の機作で作られたるものであることを見るが故に、此の保持存續の特性わ吾人を驚かすべき何物でもないのである。更らに此の事わ一つの細胞の周囲の條件が長期間に變化を蒙むる場合に其の細胞に變化が起る如く、その子孫が同じく進化を爲し得る事、或わ又それ等の變化が急激な場合恐らく急激に突然變異をも起こし得るのであるおとゆう事を妨げぬ。」

「余わ只今同一系統のミセルわ明らかに同一な條件の下に生ずることを述べた。この斷言と既に出會つた事實即ち或る生物の狀態がその年齢或いわその從がわねばならなかつた生活の種類に依つて根本的に異なるとゆう事實、及びその生物、換言すれば恐らくミセルの全化學組織がまた大きな範圍で變り得るとゆう事實と矛盾する如くに見える。が、この撞着わ皮相のものに過ぎぬ。細胞の増殖わ唯だ細胞が都合好き情況に在る、即ちそれが旺盛なる場合にのみ起るのである。例えば酵母の細胞を榮養不良の狀態に置くと増殖しない。……衰弱の時期の後、再び好況になつた場合にわ、酵母わ先づ改造とゆうことから始まり、先づ最初の旺盛時代の狀態と殆ど同じ様になるのである。而して其の後にのみ増殖とゆうことが行われるよおになるのである。」

「……ミセルわ恰かも……唯一の固定部をなす所の一種の核から出來ていて、この核の周圍が數や性質の異なる分子で圍まれてる様に作用する。若かい酵母に於てわ、更らに一般に若い器官に於てわ、此等の分子が殊に多數で老衰期にわ、それが減するよおに見える。……この消失わミセルや生物が都合のよくない狀態に置かれた時に漸次起るのであつて、この狀態が再び良好になるや否や、ミセルわ失つたものを再び吸収し、再たたび最初と殆ど同じ狀態に成ることが出来る。この若か返りが可能なる唯一の條件わ、ミセルの勢力衰喪が或る極限を越えなかつたとゆうことである。而して此の極限以上になると、それわ死の危險に陥るのである。」

こおした研究の結局に於て、最も新らしい生體化學者わ生物の靈を認めなければならなくなった。之に付き言う。

「化學わ生體と屍體との本質的な差異を確かにわ舉げ得ぬのである。たゞそれ自身がその性質を説明しなければならぬと思われるところの非物質的な靈魂を假定するとゆう事のみが、兩者の間だの完全なる同一を認定する事から化學を救い出し得るのである。」(同書二百五十二頁)

「……吾人わ余が始めに生物の靈と呼んだものの性質をば詳かにし得るだけの事柄を知つてゐる。此の靈なるものわ、生物と各瞬間に此の生物と同じ機能を有する人工的生物とを區別するところのものである。此の靈わ或る與えられた瞬間に存した機能の同一とゆう事が、此の瞬間より少しく隔つた時にわ最早存在せぬとゆう點に現われるのである。……」(同書二百六十九頁)。

生と死わ瞬間に分かれる。死の瞬間を界として、直前と直後を比較すれば、即ち死の瞬間を隔て、生體と死體を比較すれば、細胞組織の化學構造に何んの變化も起こつていない。そこで最も新らしい生體化學者わ、生體と死體の區別を結局、靈の有無に求めなければならぬとゆうのである。

單純な細胞組織に付いてさえ、解き得ない生命の不思議がある。細胞組織が最も複雑に重合して教智の良心を現わす我等人間を、もし肉體のみの存在だとするなら、それこそ空想でしかない。我等人間わ斷じて肉體のみの存在でなく、肉體以外に人間の實質となるものが存在せねばならなくなる。それを靈と名づけてもよいが、靈と

名づけると、昔の人が言う靈魂と混同される恐れがある。それで、人間學わ單純に人間實質とゆうことにする。かく顧みて生體化學者の結論を思うと、肉體を構成して生命作用に關與する主腦部分の細胞にわ、人間實質の分子が宿ることになるのである。

人體に生命があると同時に、それを構成する六十兆の細胞にもまた、それらの生命があるのであるまいか。疑がえば存在わ分子か原子か電子のみであり、山も川も月も星も、我等の目に見えるところの物わ、追究すると存在の總稱でしかないとも言える。けれども、生命の持主として生物を觀察すれば、分子や原子や電子わ生物の構造質であるに止まり、細胞さえもまた骨や肉や内臟さえも、生命を持つ生物の構造質でしかないを發見する。げに生命わ分裂しない全一體をなし、これ生命の特質であつて、この特質のゆえに、少なくとも生命の原動力わ肉體の物理であるよりも、生物の肉體に隠れて宿る特殊實質の作用であると思われ。人間學わ斯おした意味に於ての人間實質を、詳しく調査せんとする。

詳しいことわ追々と述べる。まづ新らしい組織學者の言うことを聞こお。「吾等わ唯一なる生命以外に個々なる細胞の生命の存在を吾が裡に感ずることなく、又認識することもない。吾等の生命わ個々なる部分に分解する可き合成物でわない」(舟岡省五氏『組織學總論』上卷四〇頁)。「吾等自身の肉體も亦た細胞によりて構成せらるゝものであるが、吾等わ自らの生命が唯一であつて、各個の細胞の無數なる生命より合成せらるゝものにあらざることわ疑がう可き餘地もない。生命、したがつて生物わ統一體として存在し、細胞わこれに隸屬して居る。生體細胞が若干の生活現象を呈するが故に、これを完全なる一個の生物體と做して、吾等自身の生活と對比せんとするわ一の擬説である。」(同書五三頁)。そおとすれば、人間實質わ全一體の生命であり、肉體を構成する主腦部分の細胞にわ、ただ人間實質の分子しか宿らないことになる。しからば人間實質とわ何んぞや。これ本書が明らかにせんと

する重要事項である。

生命現象の殆んど全部を物理化学によつて説明されるが、それでも遂に説明されない部分が残る。それら新陳代謝を連続さす生命作用の調節である。組織学から細胞を研究すると、細胞の機能は細胞外皮を通して爲される。

細胞外皮の巧妙な濾過器に似た役をなし、溶けた各種の栄養素を通過させて受取り、これらの栄養素は細胞体内にて接觸しあい、相互に作用して細胞組織の構造分子を合成する。植物細胞に付いて言えば、細胞体内の葉緑素が太陽光線を受けると、空気中の炭酸瓦斯より炭素を遊離して攝取し、之を根より上げる水分と化合して、植物細胞の實質となる炭水化物、即ち澱粉質を合成する。これ植物の炭素同化作用なのである。また植物細胞は動物細胞と同じく、空气中より絶えず酸素を取つて自己体内の炭素質を燃やし、それにより生育作用の根元となるエネルギーができて、無用となつた炭酸瓦斯を排出する。動物の呼吸する理由もまた同一であるが、しかし一般に炭素質が酸素と作用して燃えるにわ、相當に高い温度を必要とする。それにも拘わらず植物ももちろんのこと、動物、例えば人間にしても、體温は三十七度ほどの低温なので、普通の化学作用として、細胞体内の炭素質が酸素と化合してエネルギーを發出し、また炭酸瓦斯を排出することとわ了解できない。新しい生體化学がこの不思議な作用を接觸媒介に依ると見る。けれども細胞外皮の巧妙な濾過や接觸媒介の作用を、生物細胞のみが持つ生命力の特性だと思つておわらぬ。

フェロシアン銅の膜は生物細胞と同じに、食鹽の液を通過さして砂糖を通過ささない。また水素と酸素の混合瓦斯は五百度以上の熱を加えなければ相互作用をせぬのに、白金棉の媒介があると六十度で接觸化合をする。だから膜壁や接觸媒介の作用を、生物細胞の特性と見るは不都合である。けれども生物細胞で、膜壁を通して受取つたものを接觸化合さし、また細胞の構造質となつた澱粉や砂糖の類を通過さすに保存するだけでなく、こ

れらのものを燃やすことにより、自己活動のエネルギーを作る。それら單に機械的にフェロシアン銅が膜を通して飽和點まで食鹽の液を受取ると違ひ、生物細胞は生存している限り連続して、おとした栄養物の攝取と接觸化合を爲し続ける。然るときは無用な老廢物を生ずるので、之を體外に排出せねばならない。之が新陳代謝であり新陳代謝の連続することこそ、生物細胞に特別な作用と言ひうる。

新陳代謝の活動が盛に連続していると、攝取して化成する所のものが溜り、そこに分殖や内分泌の、益々不可解な生命現象が起こる。分殖は細胞分裂の形で行われ、高等動物の生殖もその一例である。内分泌は最近に発見されたが、人體に付いて言えば、甲状腺や脳下垂體や松葉腺や副腎や脾臓等から、生存に必要な種々の酵素質を分出する。分出された酵素質は、細胞體内の内臓で接觸化合を媒介し、體温を調節したり、糖分を保存したり、消化や其の他の重要な生活機能を營む。だから新陳代謝と分殖と分泌を生命作用、またわ生命力と稱し得るのである。

化学者の研究によれば、生物以外の化学作用にわ、よし接觸化合にせよ、平衡の飽和點があり、その度を越えて物質は互いに作用するものでない。例えば醋酸は常温でアルコールに作用して醋酸エチルと水を生ずるが、その作用は六十七%の酸が消失したとき止まる。逆に醋酸エチルを水と混ざると、前者と逆の反應で分解し、醋酸とアルコールになる。この逆反應は三十三%のエステルが分解したとき、即ち六十七%の酸がエステルでいる程度で止まる。こおしたことを化学平衡と言ひ。けれどもアルコールと酸を其の儘にして置いて、生成したエステルを各瞬間に取除くことが出来るならば、逆反應によつて妨げられないが故に、何時までも同じ作用を続ける。實に生物細胞内で邪魔な老廢物を取除けて、例えば炭素質を酸化さすなら、炭酸瓦斯を排出して、體温とエネルギーの發生を休まず続けることになつてゐる。しかし、此の邪魔な老廢物を排出する作用は機械構造さえも

持ち、ランブの口金が下から空気を受けて、ホヤの上より炭酸瓦斯を發散さす類の不思議でもなんでもないことであり、そしてまた分殖や内分泌の生理作用わ、木の葉をぬらす水滴が太く溜ると、次ぎえ次ぎえと落ちるにも似て、これら生命力の生理作用わ、物理や化學で説明し得ないでもない。それでもなお物理や化學でわ説明できない一つのことがある。それわ生命作用の調節に付いてである。

## 第七章 生理の調節作用

筋肉の機械作用わ無論のこと、肉體の雜多な生理作用わ、悉ごとく物理や化學の理論で説明できる。細胞外皮を通して榮養物を攝取したり、老廢物を排出したりすることに付いても、ランブの機械構造に比べると理解わ困難でない。しかし深く追究して行けば、肉體の生理に唯だ一つ、物理からも化學からも理解できないことがある。それわ生理の調節作用であり、例えば複雑な生理を説明する爲めに最近發見された内分泌に付いても、やはり此の疑問が残るのである。内分泌に付いて最高權威の生理學者わ言う。

「各種の養素、即ち體內え攝取せられて、榮養を行なうものである含水炭素、蛋白質、脂肪等に對してわ、何れも内分泌物が非常に大切な影響を、その新陳代謝の上に及ぼすのであります。殊に、含水炭素の代謝についてわ、最も密接な關係が、内分泌腺との間に結びつけられて居るのであります。……日本人にあつてわ一日に約五百瓦足らずの含水炭素を取つて居るのであります。……取れば取るだけ始終使われて居るので、そこで含水炭素とゆうものわ、體內で最も活潑な變化を受けて居ります。體の中に取込まれて始終壞され、始終酸化せられ、エネルギーの根元として使われるとゆう譯で、立ち代わり入り代わり新陳代謝の最も烈しいものでなければならぬのであります。」

「含水炭素は澱粉の形で取り込まれます。日本でわ米、西洋で馬鈴薯、或いはパンの如き主食品の中に、最も多量に含まれて居る澱粉の形で取り込まれて、それが消化管内に於て酵素の働きを受け、葡萄糖とゆう砂糖に變つて吸収されるのであります。併してこの腸管から吸収を受けた葡萄糖が、肝臓へ行くと、肝臓で、それが形を變えて、澱粉に縁の近い糖原質グリコゲンとゆうものとなつて貯えられるのであります。そしてこの溶けない形の糖原質に變えられた所のものが、また必要に応じて肝臓に於て葡萄糖に變えられ、静脈血に入り、心臓へ行つて全身を廻るのであります。この目的のおおむねの所にあるかと言へば、吾々が取る所の養素としてわ、澱粉が一番多いのであるから、食物が盛んに吸収を受ける時期になると、多量の糖分が吸収されて体内に入り込む。若しその際糖分が直接に血液中に入り込むならば、血液を餘り糖分が多くなり過ぎ、所謂砂糖の洪水が出来るのであります。その結果、砂糖が十分に利用されないで、その一部分は尿の成分となつて外へ出て行く、即ち糖尿が起る恐れがあります。そこで腸管から澱粉が砂糖となつて盛んに吸収されて居る時に、それを直接素通りをさせない様に、肝臓が待ち構えていて、之を溶けない形の糖原質に變えて自己体内に貯えて置く。そして筋肉が餘計働いて糖分が消費された時に、要るだけづゝ再び糖原質を葡萄糖に變えて血液に與えます。それであるから、血液内の一般葡萄糖の分量は、何時でも、また何處でも、通常同じ分量（ $0.08$ 乃至 $0.07\%$ 位）を有つて居ることが出来るのであります。又、細胞内、たとい外から食物を仰がなくても、或る程度までわ、肝臓とゆう庫の中に貯えられた糖原質が、血糖に變つて送り出されるので、大變に都合よく榮養を行なうことが出来るのであります。」

「今この含水炭素の新陳代謝が故障を受けると、前述のよおに尿中に砂糖が出て来て糖尿を起します。………要するに攝取した含水炭素が十分に利用せられず、その大部分が體を素通りして出て来るのでありますから、

體の榮養は非常に悪くなるのであります。」

「また糖尿の病状を實驗的に起さすことも出来る様になりました。即ち千八百九十年に、メーリングとミンコフスキーとゆう二人が、動物に於て膵臓を全然取り除いて見た、おすると尿中に糖が出て來ました。之を膵性糖尿と名附けます。……一方に於てわ佛蘭西の有名なクロード・ベアナルとゆう人が、初めて實驗的に大切な事實を突き止めた。それわ延髓の一定の場所を針で刺すと、糖尿を起すことが解かつて來たことである。このことを糖刺と名附けました。……糖刺の研究によつて次の事實が明らかになりました。それわ腹部の内臓に分布して居る所の、大小の内臓神経、この交感神経の一種に屬する内臓神経を切斷すると糖刺をしても無効になる。即ち糖尿が起らないのであつて、内臓神経が健全である間わ糖刺が有効であります。その糖刺の有効である時を見ると、肝臓内のグリコゲンが減じて血糖過多を起すのであります。斯く考えると糖刺の爲めに内臓の交感神経が刺戟を受け、肝臓に影響を及ぼして、肝臓内に於て糖原質が溶ける形の葡萄糖に變えられる。……膵臓が健全である間わ、その送り出すホルモン（インズリン）が血液内に與えられ、循環して肝臓に來ると、肝臓に於ける糖原質を葡萄糖に變える働きを抑制します。……そこで膵臓を取り除きますと、このホルモンが來なくなり、膵臓のあつた時よりも餘分に砂糖が造られることになるのであります。」

「所が今一つ、第三の面白い大事なことが解かつたのわ副腎の關係であります。副腎の髓質から造り出さるアドレナリンとゆうものを、動物に注射しますと糖尿を起すのであります。之をアドレナリン性糖尿と申し

ます。……副腎體質のホルモンたるアドレナリンの肝臓に及ぼす影響は、要するにグリコゲンを砂糖に變える働きを促すものであることが解かります。……膵臓のホルモンは肝臓における糖生成を抑制して居るので、膵臓の働きをなくすれば、その抑制がなくなるから、肝臓における糖生成の働きが餘計になり、その結果矢張り血糖過多となり、糖尿を惹き起すのであります。」(永井潜氏『内分泌』七一頁以下)

内分泌とゆうわ、肉體の或る臓器の腺から分泌される有效成分が血液の中に入つて、他の臓器の機能に作用することであり、その分泌する腺を内分泌腺と名づけ、有效成分をホルモンと言う。アドレナリンは副腎の内分泌腺から出るホルモンであり、膵臓から出るホルモンはインズチンと名づけられる。

「アドレナリンの作用を一言にして盡せば、交感神経末端を刺戟するものである。交感神経は全身に配布して居るから従がつてアドレナリンの作用は全身に涉つて居る。……即ちアドレナリンはグリコゲンを糖化せんとし、膵臓のホルモンは糖化を抑制して、グリコゲンとして貯藏せんとし、相互に正反對の作用を有する。此の兩作用が適當に釣り合つて含水炭素の新陳代謝が調節せられて居るのである。アドレナリンは前述の様には交感神経を刺戟するものであるから、膵臓のホルモンは交感神経を抑制するものと考えられる。」

(加藤元一氏『生理學』下卷三六七頁)

「副腎を寧ろ腎臓に影響して居るもので、……アドレナリンは腎臓が葡萄糖を通過せしめる性質を高めてあります。……此の如くにして斯の關係は、新陳代謝の上に於て、時の關係からも、量の關係からも一番大切

な、始終活潑な變化が行なわれなければならない所の、肝臓に於ける含水炭素の新陳代謝を調節する働らきに對して、一方に交感神経により、一方に膵臓により、更らに又た第三にアドレナリンが交感神経の緊張を高め、糖刺と同様に働く關係から影響せられること、また第四にアドレナリンが直接腎臓に於ける糖の透過性を促がすやう、種々複雑な働きが行なわれて居ることを語るものであります。更らに第五に、今一つこの關係を複雑ならしむる事柄は、腦下垂體のホルモンが丁度アドレナリンと反對の働きをする事であつて、即ち腦下垂體ホルモンは、腎臓に於ける糖の透過性を抑制して居るのであります。」(永井潜氏『内分泌』七七頁以下)

肉體生理の働きは、殆んど全部が物理と化學に依つて説明される。たゞ一つ説明できぬことわ、内臓の交感神経やホルモン等の調節である。之をランブの例で言うならば、口金の處から新しい空氣を入れ、ホヤから邪魔になる炭酸瓦斯を吐き出すが、しかし、ランブが明かるく照るにわ、人がマッチで點火せねばならぬ。そのランブも石油がなくなると消える。消えないよおにするにわ、續いて石油を入れねばならぬ。マッチで點火し、或いは續いて石油を入れる類のことを、調節と言うのである。肉體の生理に付いて、こおした調節をするものわ、交感神経と副交感神経であり、總稱して自律神経系統とゆう。例えば心臓は交感神経を刺戟すると機能が積極的に促進され、副交感神経を刺戟すると消極的に抑制される。内分泌のホルモンは交感神経また副交感神経を刺戟するに役立つがしかし、内分泌そのものを何に調節するかと尋ねると、それが藥品、即ち他のホルモンであつても、結局は自律神経の調節に歸するのである。

内分泌の外にも外分泌と言わねばならぬものがあり、尿や汗や消化液等外分泌に屬する。内分泌と外分泌



と、各種の分泌作用に共通して、生理學者が言う。

「分泌物中に二種の成分がある。即ち尿中の水や食塩の様に血液中に既に存在せるものと、今一つ唾液中のプチャリンなどの様に血液中に全然なく、腺細胞の作用によつて始めて創造せられるものである。後者、即ち其の腺に獨特の成分を作る反應の一つの可逆反應で、腺細胞が静止状態にある間に原料を血液から取つて特有成分の前階級にあるものを製造し、一定量が出来た所で其の反應が平衡状態に達する。その時神経からの刺戟又薬品によつて腺細胞が刺戟を受けると、恐らく細胞内にある大きな分子が分解して多数の小分子に分かれるために細胞内の滲透壓が高まる。依つて細胞内に水分を吸引する。同時に細胞の導管に面せる側の透過性が増加するために細胞内の有效成分を導管の方へ水と共に流れ出ることになる。」(加藤元一氏「生理學」下巻三四二頁)

薬品また他のホルモンも刺戟となつて調節の働きをするが、根本に内分泌を調節するものも神経作用であり、その神経作用が調節して内分泌を起こし、内分泌が起こると、それがまた神経作用を刺戟して、複雑な生理の諸活動となるのである。比較して言えば、ランプを点火し或いは續いて石油を入れると同じ調節が、自律神経を中心として肉體生理の基礎にあり、この調節こそ生體と死體を分かち結ぶ特徴である。

生理の調節作用は機械的であるよりも化學的であるらしい。例えば、筋肉が収縮するに刺戟がなければならぬ。この刺戟は温熱から來ることもあるし、打撃などの烈しい機械力から來ることもあるし、また電氣に觸れると忽ち筋肉が収縮するが、刺戟は如何なる種類のものであつても、それから化學的な變化を起こして筋肉の興奮と収縮になるらしい。今日信じられている所で、刺戟は筋肉の組織内に乳酸を生ぜしめ、それが筋肉収縮の原因になるとゆうことである。之を更らに刺戟を傳える神経纖維について見れば、神経傳導もまた化學作用によるらしい。それゆへに火薬の「つな」に火をつけた様なもので、火薬のある限り爆發が傳つて、途中で消える事のないのと同様であると、加藤元一博士が言う。「生理學」上巻四二七頁。神経傳導の生理に付いては有力な反對説もあり、また學者の意見が決定しておらぬけれども、化學作用であることだけは疑がう餘地がないらしい。なぜなら神経傳導に酸素が必要であり、神経を純窒素氣中に入れておけば傳導しなくなるからである。

神経傳導は化學作用である。それにしても、その傳導を開始したと中止すること、物理や化學の機械作用でなくて、中樞神経から心理的に起こるところのものである。しからば心理的な刺戟が、どおして物理の生理作用に展開しうるのか。之に付きまた判明な説明はないが、恐らく人間實質の微かな分子振動が、生體細胞の微粒子をも振動せしめ、それが刺戟となつてホルモンの生理作用を展開せしめるのであるまいか。かく心理と物理の初發に於て合致しつゝも、また分化するのである。

生理の調節作用を了解する爲め、工場の機械のことを思ひおこしてみよ。機械工業は進歩してフル・オートマチック・マシンとゆうものができた。それを紹介する冊子に次のよおなことが書いてある。

「本年(昭和八年)九月から開業する米國ニューヤージー人造絹絲工場では、一人の労働者を使用せず、川向かいの紐育の事務所にある錠一つを押せば作業を開始し、或は終業せしむるとゆう驚くべき設備であります。ところがもし何にかの調子で器械に故障が起きたときにわどおするか、そのときわ、せめてそれを修繕する職工の若干位は入用であるおと思われるのでありますが、ところが、その故障もチャント別の器械が直す、修繕

用の器械に故障があると、そこえ又も一つの器械が飛出すとゆう有様、つまり一千人からの職工を要するところを、社長一人がボタンを押せば工場を永久に活動するとゆう仕組みであります。」

自動機械の精巧な工場でも、社長が仕事の開始や終業や、また時々機械の調子を直す爲めに釘を押さねばならぬ。まして人體が非常に精巧な自動機械であるから、なおさら社長にも似た中樞神経の心理で休みなく種々な刺戟の釘を押す必要がある。これぞ生命の調節作用であり、これだけ決めて物理や化学の機械力で説明ができない。

生體化學者が死の瞬間を隔て、生物を検査すると、死の直前と直後に於て、構造と組織の上に何にの相違をも發見せぬ。それにも拘わらず、生體にわ生命の調節作用があり、死體にわこの調節作用がないとゆう非常に大きな相違がある。そこで生體化學者わ生と死の區別を、遂に靈の存在に歸せしめねばならぬとする。之を思い生理の調節作用を顧みると生理の調節作用わ靈の存在が擔當するところのものであり、神経系統の機械的な生理作用そのものに依るのでわないのである。この説明を上の方に對比して再思すれば、誰れもが判明に了解するであろう。

死の瞬間

體 死	體 生
-----	-----

死の瞬間を隔て、同じ生物を検査すると、生體と死體にわ物理構造と化學組織に何にの相違もない。死體の筋肉わ強直するが、それも化學的な條件によつて起こり、

抽出された筋肉さえ、十分に酸素を供給すれば、死の強直わ現われぬ。肺炎で死亡した小兒の心臟を、死後二十四時間に抽出して活動せしめた例さえある。心臟にわ自動の神経結節があり、中樞部から傳わるものに似た刺戟を與えると、抽出された心臟が鼓動を始める。それだから死の瞬間を隔て、生體と死體を較べると、物質構造や化學組織に何んの相違もないことわ確かであるに拘わらず、生體にわ生命作用の調節に依つて有らゆる種類の生活現象が現われ、死體にわ悉くの生活現象が滅びた。そこで生體化學者わ、この激變の起因として、生體にわ靈があり、死の瞬間にわ靈が生體を去るから、構造と組織に付いて生體と區別のない死體に、もお生命の現象がなくなつたと説明せねば、とおてい他に理解の方法がないとゆうのである。

生體化學者のこの考察を一層深く論議すれば、物と力を別の存在とわ見ない理論物理學者の一般認識に根本の基礎を置く。昔わ物の存在なしに、たゞ力のみが作用し得ると思おた。靈と言ふも、そおした考え方の結果であり、それゆえ生體と死體を區別する起因體を靈とゆうならば、物のほかに力のみが單獨に存在しうらと思ふ昔の考え方でわないかと誤解される。こおした誤解を恐れて、我等わ靈の文字を避け、他に適當な言葉を撰ばねばならぬ。

物の外に獨立して力のみがあり得るであらうか。即ち物を離れて、力のみが、たゞフアリ／＼と、例えば幽靈の如く、お化けの不思議な術をするであらうか。近世の理論物理學わ斷然と之を否定する。力わ物の作用でしかない。電氣に付いてさえ、電子が認定されて、電子の物質活動が電氣だとされている。

有名な英吉利の電氣學者ケルビン卿が電氣工場を視察したことがある。その工場の技師が隔々まで案内して詳しく説明した。最後に技師わ何にか質問があるかと尋ねた。ケルビン卿わ靜かに電氣とわ何にかと問おた。技師わ答えが出來ず、一たい貴殿わ誰れかと聞いた。ケルビン卿わ自分がトムソンであると告げ、電氣のことなら何

にでも知つておるが、解からぬことが唯だ一つ、電気とわ何にか、この根本問題を聞かれ、技師を全く低頭してしまつた。ケルビン卿とわ、學者トムソンが電気學の功勞に依り貴族に列せられた敬稱である。

不思議な電気の方も、今日でわ電子の物質活動でしなくなつた。不思議な悉ごとく消滅し、力わ必ず物の作用である。不思議とわ、物の起因を離れ、力のみが幽霊の如く、たゞフラ／＼と揺ぐことである。そんな不思議な断然とない。だから生體化學者も、生體が死體と構造組織を同一にするに拘わらず、生體のみが生命作用を現わすから、どおしても生物にわ肉體以外に、生命現象の起因となる實質がなければならぬと斷定した。

理論物理學の一般認識によれば、物の起因體を離れて力のみが單獨にわ存在し得ない。生命作用を調節することも力である。その力わ死體と構造組織を同一にする生體のみに現われるが、物理の力でも化學の力でもない。しかるに物としての肉體から起り得る力わ、物理作用か化學作用に限られている。そこで生命の調節とゆう全く特別な力が現われるにわ、肉體以外に何にか別の實質があり、それから起因するものとしなければ、力を物の作用と見る理論物理學の一般考察が維持できないことになる。だから生體化學者わ止むを得ず、そおした特別な實質を承認するのである。

生命の調節作用が藥品にも似たホルモンの働きであれば、物理か化學の力で理解し得る。けれどもホルモンさへ自律神経系統の調節と刺戟を受けて發生し、逆に自律神経系統を刺戟するに役立つ。自律神経系統の調節作用こそ物理と化學を超越した特別な生命力であり、我等わ之に對し特別な起因體を承認せねばならなくなつた。

神経があるでわないか、神経こそ特別な生命力の起因體でわないかと疑がう人があるかも知れない。けれども神経わまた肉體の一部であり、この神経から肉體一般の物理や化學に見えない特別な生命の調節作用が起ころので、肉體の一部に過ぎぬ神経以外に、隠れた特別な實質がなければならぬとゆうのが、生體化學者の新らしい考

察である。しかし、この實質を靈と名づけると誤解されるから、我等わ精神體と名づけることにする。なぜなら

この實質わ生理の調節作用だけでなく、最も大きな働らきとして、心の精神作用をするからである。心の精神作用を意識ともゆうから、意識體と名づけてもよい。

## 第八章 心理の精神作用

神経肉體の生理を調節する刺激を伝える。こおした役目をするもの、主に自律神経系統に屬し、交感神経や副交感神経である。その他に腦神経の系統に屬する神経があり、知覺と運動の意識作用を伝える。なかでも大脳意識作用の中樞となつて、高等動物ほど其の發達が著しい。我等人間の大脳が最高度に發達し、ここに叡智の作用があるばかりでなく、無意識な情慾その他の反射作用に對し、強い抑制の働きをする。この大脳の働らきを心理作用とも、また精神作用とも言う。

肉體の機械的働らき、また内分泌の諸作用、疑がもなく物理か化學の力であるが、生理の調節だけ、物理でも化學でも理解ができず、靈と言うにわ不適當な、精神體の人間實質があつて、神經組織のうちに重合し、それが調節するのでなければならぬを、我等が既に認めた。まして、生理の調節よりも一層複雑な意識の心理作用、物理や化學の力と比較さえもできない全く種類の違う別の力である。そのうち最も進んだものを叡智の精神作用とし、叡智の精神作用、物理や化學で想像さえも出来ない完全に異なる種類の力であるから、それに付いて特別な起因體がなければならぬ。この起因體を決して肉體そのものであり得ない。なぜなら、肉體が死の瞬間を離れて調べると、生體と死體に組織や構造の區別がなく、單純な生理の調節さえも起こすに足りないからである。そこで叡智の精神作用の起因體も、神經組織のなかに重合して存在する肉體以外の精神體だとせねば

ならぬ。叡智の中樞は大脳だから、精神體は大脳に重合して存在するといわれる。それを意識體と名づけてもよいが、精神諸作用の起因體となるから、肉體と言うに比べて、我等が精神體と名づけることにした。靈とゆうよりも一層精しい、神に近い人間の實質であるぞと知らすため精神體と名づけることにした。意識體とゆうもよい、叡智の良心とゆうもよい。つまり、肉體以外に存在する人間實質なのだ。顧みれば、精神體を構成する實質の低い程度のもが、延髓や脊髓にも重合して、それが反射作用その他の無意識な生理の調節作用をする根元になると理解すれば、生體化學者の疑問が完全に消滅するのである。

理學一般の認識によれば、力が異なるにつれて起因の物體も異なるとされる。この理學一般の取扱いか方からして、我等がどうしても特別な生命の調節作用に對し、肉體と特別な人間實質の起因體があるとせねばならぬ。なぜなら、物理や化學の力にわ、がんらい調節とゆうことがなく、自然の力、物理のものでも化學のものでも後に詳しく言う如く、例外的ない定關係の即時作用をなし、調節や撰擇は心理の特質である。まして調節と撰擇の最も複雑な叡智の精神作用、とてい物理や心理の機械理論でわ理解できないのである。そこで我等が叡智の精神諸作用を働らき出す人間實質が肉體のほかに存在するものと認め、之を精神體と呼ぶのであるを了解されたい。

自然の變化は一定している。自然の物と物とわ例外的ない法則の定關係をなして、事物の性質の相違により混雜のない分類を許す。分類こそ知識と學問の基礎であり、我等が性質が類似するとき同種の存在であることを認め、性質が異なるとき別種の存在であることを知る。心理の精神作用にわ物理や化學の力と少しの類似もない全く別の特色があるので、之に付き物理や化學の生理作用を起こす肉體とわ別種な存在がなければならぬと言う。再び厳重に確認すれば、力、物の起因なしに起こらないから、精神作用の特別な力を起こす存在も、肉體と異なりなが

ら、やはり物の實質であることと疑がない。この特別な物の實質を精神體と名づける。それ果たして如何なる物の實質であるか。まづ心理の精神作用が持つ特色より検査しよう。

心理の精神作用にわ、どんな特色があるであらうか。俗に知・情・意と言うのが、その特色である。知と言えは難かしいが、感覚が知の最初であり、この感覚を見るだけで、それが全たく物理や化学にない特別な作用であるを發見する。感覚にわ快不快の感情が伴ない、その感情が高まると動作となつて、喜怒哀樂の複雑な感應にまで發達する。情とゆうわ、快不快の感情や、喜怒哀樂の感應を總稱する略語である。動作わ筋肉の働らきであるから、物理の機械作用で理解できる。しかし、それが單純な物理の機械作用であれば、例外的ない確定變化の一方向にしか作用し得ない筈であるのに、感情が高まるにつれて起る動作わ、決して方向を一定せず、もし、その動作を妨げる障害でもあれば、迂回し屈曲し、或いは強襲し逆襲し不意を襲い、またわ隠忍して時期を待ちつゝ幾回となく、多年に亘つて繰返えし繰返えし、遂に感想の希望が満足されるよおに努力する。こおしたことを意思と言い、意思の持つ此の特色わ、決して物理の機械作用にないことである。かくの如く意思わ筋肉の動作を起こすけれども、筋肉の動作が意思でなく、筋肉の動作を指圖するものが意思である。指圖こそ生理學者の調節とゆうものに當たり、その無意識なものわ本能の反射作用である。しかし、それさえ追究すると、物理や化学の力でわ説明できないことを知つた。

知情意と言ふけれども、三つの異なる心理の精神作用が別々にあるわけではなく、一定の感覚が起るにつれてそこに快不快の感情も起こり、それが進行すると、肉體の動作を指圖し、その結果から喜怒哀樂の感想ともなる。分裂して知情意の三種があるらしく見えるが、實わ連続した全一體の意識作用が統一した働らきをしているのである。

我等の意識を顧みれば、瞬間も停止せず何時も活潑に動いて、その内容わ變化極まりない。しかし、別々の作用が群がり起こるのでなく、唯一の意識が流れて、その流れに變化があるのである。こおしたことを意識の統一性とゆう。

意識わ變化する。けれども、その變化わ膨張し收縮し、譬えて言えば、川の流れが廣くもなり狭くもなり、或いは激して急流となり、或いは緩く湛えて小波を起こす類の、分裂せずに連続した全一體の精神作用である。之わ我等が自分自身の意識を觀察して確認する事實であり、自分自身とゆう自覺さえ、意識の精神作用が統一して全一體をなす所に起こるものである。

意識わ統一している。進行して複雑な感情や意思となるが、統一した意識の精神作用わ、單純な感覚から開始される。だから心理の精神作用が、物理や化学の簡單な生理作用でないことを確認し、その起因に肉體以外の精神體がなければならぬを知るにわ、複雑な心理作用に付いてよりも、その初發である感覚に付いてまづ考察するがよい。

感覚わ如何にして起こるのか。昔わ全たく不可解であつた。一方に生理學が開け、他方に心理學が進み、今日でわ感覚の起こる理由だけわ明らかになつた。感覚が起こるにわ、必らず外界の物體から刺戟の波が傳わり、その波を目や耳等の感覺器に擴がる神経纖維の末梢が受け入れ、それを更らに神経纖維が大脳の神経細胞にまで傳えることから、凡べての感覚が起こると判明したのである。しかし刺戟の波を傳える神経纖維や刺戟の波を受取る神経細胞の生理わ感覚でない。もちろん外界より來る刺戟の波が、そのまゝ感覚でもない。それゆえ感覚の起こる原因が判明するほど、感覚そのものの性質わ逆に不可解となるのである。

神経纖維わ外界より來る刺戟の波を傳えるに過ぎない。刺戟の波わ神経細胞にまで傳わる。此波が傳わる生理

わ、機械作用であるかに思われたが、新しい研究によると、機械作用よりも神経構造質の化学作用であるらしい。いづれにしても刺戟の波を伝える生理的、物理的、化学的力の働らきであり、それ自体が感覚でないことわ繰り返えし述べるまでもない。それなら刺戟の波が、そのまゝ感覚であるのか、一般の常識でわ、刺戟の波を感覚でもあるかに思っている。それよりも甚だしく、刺戟の波を起す原因の外界物體を、そのまま感覚でもあるかに思っている。櫻の花が美しいとか、太陽が丸く光るとか、まあ、それほどに、普通の常識わ軽く感覚を思い誤っている。

太陽丸く光つて見える。しかし太陽果たして丸く光るのか。牛の目にわ太陽が四角で薄暗いかも知れない。馬の目にわ果たして如何に映るであらうか。もし牛も馬も、また私の自分自身も、即ち人間も存在しなかつたならば、太陽が丸く光ることを誰が報告するであらうか。物それ自体と、それより起る刺戟の波、單に物理的存在であるに止まり、丸いとか光るとかと感覚に現わすわ、我等人間が受ける気持ちを發表したのである。

刺戟の波そのものに付いて物理學的研究を進めた。その結果によると、光線ならば、波の速度わ一秒間に三億メートルほどだと計算する。また赤ならばその波の長さを〇・六五六二ミクロン（ミクロンわ耗の千分の一）と知らず。しかし感覚わ、そおした波の速度や、波の形その物でなく、刺戟の波が目や耳等の感覺器に擴がる神経纖維によつて取次がれ、腦髓の神経中樞に傳わると、そこに重合して實在する私の精神體が、その刺戟の波に共鳴して動揺するとき、私の精神體に起る氣持が、即ち感覚なのである。だから外界の物體と、それからの刺戟の波わ、感覺の原因であるが、感覺そのものでなく、感覺わ外界の物體と、それからの刺戟の波を、原因として起る結果なのである。

感覺わ外界の物體より來る刺戟の波を原因とするが、原因わ結果から區別されて、赤や白や種々な色と、甘い辛い種々な味等の感覺わ、それらゝの物體、例えばバラの花や降る雪や砂糖や塩の外界物體が原因となり、それらの外界物體より形の變わる波が動揺して來て、感覺を起す原因とわなるけれども、原因そのものが結果でなく、結果と原因わ必ず區別されねばならぬ。

風わ帆船を走らし、撞木わ鐘を鳴らす。しかし原因と結果わ別であり、風わ帆船から、撞木わ鐘から區別される。感覺を起す原因に物體からの浪があるけれども、物體の浪そのものわ斷じて感覺でなく、物體の波わ神経纖維を通り、中樞の神経細胞にまで傳わると、それもまた刺戟の動揺であるに止まり、譬えば電話の口が人聲を受けて、電線により人聲の刺戟の波を交換局に傳え、交換局から再び、電線を通つて、その波わ受話機に傳わる。それでも人間の耳が聞かなければ、刺戟の波それ自身わ決して感覺とならぬ。外界の刺戟わ何處えどんなに傳わつても、例えば世界の隅から隅のはてまで傳わつても、波わたゞ波として動揺し、感覺の意識作用の單純なものにもなり得ない。この確かな事實から、我等わ安全に言い得る。感覺わ外界の刺戟から起るが、感覺わ刺戟の波と違ふ。刺戟の波わ物理の力であり、それわ感じさす働きをする。之より起こつて、之と異なる感覺わ、心理の力であり、感ずる働きが、その作用なのだ。即ち力を最も大きく別けるならば、感じさす物理の力と、感ずる心理の力の二種となるのである。

力わ起因體なしに起こらぬから、物の理力でない心理の力、即ち感覺その他の高級な意識の精神作用に付いても、その起因體がなければならぬ。刺戟の波を作用し出す起因體を客觀と言うに對し、心理の力を作用し出す起因體を主觀と言う。感覺わ客觀が刺戟の波を起こし、その波に主觀が共鳴するおり、主觀のがわに起こる意識の精神作用なのである。昔より主觀と客觀の言葉がありながら、それが果たして何にを意味するかに付き、また

全然性質を異にする主観が、どおして客観を知り得るかに付き、解決のできない疑問があつたのであるが、かく主観と客観を考察することによつて、此等の疑問が悉ごとく解決されるのである。

力わ物なしに起こらぬ。だから感覺の原因となる客観が物である如く、結果の感覺そのものを作用する主観もまた物でなければならぬ。それでも種類と性質に付いて、主観の物と客観の物とに大きな相違がある。相違の最大なものわ、客観わ感覺の原因となる刺戟を發し、主観わ刺戟を受取つて感覺を起すことである。げに主観と客観にわ、これほどの大きな相違があるのである。しかし主観の存在わ必ず物であり、その性質として刺戟の波を受取る。そのおり主観の物それ自體も、刺戟の波に動搖する。これわ主観が物である限り、疑がう餘地のない當然な推論である。客観の物からわ刺戟の波が動搖して來る。その波に主観の物も共鳴して動搖する。そのおり主観のがわに起こる氣持ちが、即ち感覺である。だから此の事實を理解する爲め簡約して言へば、客観わ物理的のみに動搖するが、主観わ物理的に動搖すると同時に、その動搖につれて感じの心理作用を起すのである。そこで客観の物わ感じさす力を持ち、主観の物わ感する力を持つと決定されるのである。そして存在としての物を大別すれば、客観と主観の二種となり、また作用としての力を大別すれば、感じさす力と感する力の二種となる。感する力こそ感覺の持つ特色の最も大きなものであり、感する力わ進展して、思う力、知る力、判斷する力ともなる。これ心理の精神作用に固有な最大の特徴である。言葉を擴めて再言すれば、客観の物わ感じさす力、思はす力、知らす力、判斷さす力を持ち、主観の物わ感する力、思う力、知る力、判斷する力を持つ。これぞ物理と心理を區分する境界線である。

永い間の疑問が、いま判明した。客観わ外界の森羅萬象であり、主観わ我れの間實質である。森羅萬象の客観物體からわ、絶えず刺戟の波が來る。客観物體わ刺戟の波を起す作用をなし、その作用の波に主観物體の人

間實質が共鳴してまた動搖する。その瞬間に主観物體の間實質に起る氣持ちが感覺なのである。客観物體わ感じさすもの、主観物體わ感するもの、かくの如く主観と客観の性質と相互關係が判明した。

主観の我れの精神體も存在であり、物でもある。しかし物理と化學が取扱かう一般の物とわ種類を異にし、例えば宇宙間に光を傳えるエーテルがあるとすれば、光を傳えてその速度に抵抗しないエーテル。わ他の物質と非常に異なる特別の存在實質である。精神體もまたエーテルほどに種類の違がう特別な存在の實質であり、果たして如何なる存在であるかわ追々に述べることとしよ。ともかくも精神體わ存在の實質であり、その特性として物から起る波動に感する心理の意識作用をする。これわ事實であり、これほど確かな事實わないのである。従つて我等わ心理作用の起因體として、精神體の存在を承認せねばならない。しかし宇宙間に果たしてエーテルが存在するかに付いてわ、新しい理學者の間だに異論がある。それでも普通教科書にわエーテルを認め、例えば田丸卓郎博士の物理學講義にも次ぎの如く記述してある。「真空わ所謂物質こそなければ、物質でない所の光の媒質が之を充たして居るとせねばならない。……光波の媒質わ、吾々が之を捕えて或處から取除くと言ふことの出來ない一種特別なものである。……この不思議なものをエーテルと稱える。」(同書五六六頁)

理屈でわない。事實である。存在わ疑わす、そのまゝ確認せねばならぬ。水わ流れる。その原因を地球の引力だとしても、なぜ地球に引力があるかと問へば、理屈を遂に事實の確認でしかないを知る。理屈を疑がうより、正直に事實を確認しろ。學問とわ知識とわ、たゞ事實の確認なのである。正直に事物相互の確定關係を、たゞ事實として確認することのみが、知識であり法則でもある。知識と學問わ、それ以外に斷じて不思議な何にもものもないを、判明に悟らねばならぬ。

客観わ感じさし、また知らす力を起し、主観わ感じ、また知る力を起す。これ全たく別の力であり、客観

より起こる物理の刺戟の波、どこかで突然と心理の意識作用に激變せねばならぬ。その激變を目や耳等の感覺器で起こらず、神経纖維の途中でも起こらず、神経細胞の密集する大脳で起こる。それなら神経細胞が、この激變を起こすであらうか。

神経細胞の刺戟の波を受取る終點となるが、しかし一般普通の物であり、それら唯一の卵細胞が増大して分殖した身體細胞の一部分に過ぎない。刺戟の波、この終點に於て心理の感覺に激變する。だから、そこにわ生體と死體を區別すると同じ程度に、著大な區別がなければならぬ。感じさす力と感する力と、この大きな激變が、そこに起こるのである。もし神経細胞そのものが感じさす力を起こし、生體と死體をも區別し得るなら、生體化學者わ別に靈を推論しなかつたのである。

客觀のほかに主觀があり、知らず刺戟の力のほかに、知る意識の力がある。それら精密に生體と死體の區別に相當する。



客觀と主觀の區別は何處で起こるのか。何處で起こるでもない。客觀と主觀が存在そのものを別にする。もし之に反し客觀と同じ種類の存在が、そのまゝ主觀でもあるならば、主觀は唯だ刺戟に動搖し、知らず力の繼續でしかあり得ない。それが知る力に激變するわ、必らず同じ客觀の繼續でなく、全たく別の存在があり、之に刺戟の波が衝突するから、そこで知る感覺の心理作用が起こるのである。即ち知らず力を持つものが、知る力を持つ

ものに行き當り、始めて知る力の精神作用が起こるのである。知る力を持つものこそ主觀であり、之を人間實質の精神體とゆう。

頼みれば神経細胞は百億に近い。そんなに多数な神経細胞が其のまゝ主觀の我れであれば、それこそ我れの意識を混亂して、そこに統一があり得る筈がない。心理の精神作用に統一性あること、それが百億の神経細胞を我れとせず、我れの間實質は百億神経細胞の肉體に重合して、客觀とわ全たく別に存在する主觀の、唯一精神體でなければならぬ理由ともなる。しかし精神體が神経細胞がいかに實在することの最とも判明な理由、物理の一般法則から嚴重に論證されねばならぬ。順序を追い之を述べよ。



## 第九章 眞の唯物一元論

宇宙の構造を研究して、例えば地・水・火・風と言うよおに多数の元素から成ると見るを多元論と言ひ、之に反し唯一の元素から成ると見るを一元論と言う。多元論が正しいか、或わ一元論が正しいか、それわ理解の難易に依つてでなく、どちらが宇宙構造の事實であるかに依つて決定されねばならぬ。古代の希臘人が宇宙を地・水・火・風の四元素より成ると考えたことも、今日から見れば一元論である。地や水わ物質として共通類似の元素から成り、火や風わその作用に過ぎない。即ち化学者の發見する諸元素を物質と見るならば、また物理學者の發見するエネルギーを、物質相互の作用とするならば、地・水・火・風の四元素から宇宙が成ると理解するわ、實わ物と其の作用から宇宙が成ると見る唯物一元論に過ぎぬのである。この意味に於て現代の人わ唯物一元論を承認している。

現代人の多くわ唯物一元論を承認して、宇宙わ物質の一元から成り、力わ其の作用だと思おている。もちろん物質の一元と言うても、その中にわ酸素や水素や幾十の元素があることわ事實だ。もし之を電子にまで逆のぼるならば、その種類わ少ない。それでも陰電子と陽核があるならば、なお二元論と言えないこともないが、しかし、陰電子も陽核も物質であるから、やはり唯物一元論と見て差支がない。之に對し二元論と言うのわ、物質以外に靈魂を假定するとか、神を假定するとか、物質でない全く別の存在を承認することである。物のほかに

力を假定するも、また二元論なのである。

物以外に力があれば二元論である。二元論を劣ると言わぬ。物以外に力があるか否や、それを事實として問うのである。物以外に力があるならば、二元論が事實であつて正しい。反對に力わ物質の作用に過ぎず、存在としてわ物のみであれば、一元論が事實であつて正しい。一元論が優るとか、二元論が劣るとか、觀念の上に理解し易いことの優劣を争おてわならぬ。

簡單なほど理解し易いが、複雑に存在するものわ、複雑に承認せねばならぬ。一元論はか、二元論はか、事實の上に確認し、決して觀念の上に優劣を批評してわならぬ。新しい理論物理學が發達し、眞空管内の放射作用から、原子わ電子より成ると斷定された。電子とその陽核もまた電氣を荷なう粒子であるらしい。こゝに物と力が一元に決着し、奇妙な電氣も電子の作用と見られ、唯物一元論が凱歌を擧げた。また新しく宇宙物理學が發達し、力のなかの最も速い光線を研究してみると、それも光粒子とでも名づけられねばならぬ物質粒子の波動であることが承認された。最も新しい宇宙物理學者わ、光の波わエーテルと言う特殊物質を假定して、その媒介により傳わると説明する必要がなく、十七世紀に於て既にニュートンも指摘した如く、光の粒子それ自體が一秒間に三億メートルの速力で宇宙の眞空中を飛んで來るのだと主張する。光粒子わ束をなして雲集し、波形に飛んで來ると主張する。力わ物の作用だとする唯物一元論わ、愈々凱歌を擧げて新しい學理となり、また現代人の一般常識ともなつた。

光粒子説にわ幾つかの難點がある。天體、例えば太陽から光粒子が飛んでくるなら、太陽の實質わ刻々に減少し、遂に消滅せねばならぬこととなる。天體物理學者わ之に答えて、太陽わ光熱を發射することにより、一分間に約二億五千萬噸の割合で重量を失おていて、數兆年の後にわ、その大部分が消滅すると推測する。奇妙で

も、まあ、それでよいとして、こゝに一つ大きな難點がある。それわ温熱に關することである。天體を離れると温度わ下がり、虚空の天界わ華氏零下四八四度とされる。然るに宇宙間の全物質にわ同じ温度とならんとする傾向があるを一般物理學わ檢出する。それで、光の粒子が極度に冷たい天空を通つて遠い旅をするのなら、太陽の光線も途中で熱を失なう筈である。之わ確かに難點に見える。しかし、考え直してみると、エーテルを否定したことであるから、眞に空虚の宇宙間にわ何んの物質もなく、だから光粒子の運動わ妨げられないと同時に、熱を奪われることもない譯けである。それなら空虚の天界わ熱に對して作用をしない完全な不良導體と同様であり、天體わ凡べて温かい衣を着ているとも想像し得る。そおとなると太陽實質わ刻々に地球え附加され、また地球わ次第に氣温を高めるとも想像せねばならぬ。地球にわ遠い過去に氷河時代があつたを思うと、こおした想像が事實かも知れない。それでわ、カント・ラプラスの星雲説が誤まりとなり、地球わ遂に熱球となつて、生物の生存も許されなくなるであらう。

宇宙の構造に付いてわ、構造物質とその物理が地球のそれに大差ないを示す程度であり、重要な種々のことわまだ知られずにいる。しかし、宇宙を構成するものが、物質とその作用の唯物一元であることわ確かである。それでも生命と心理に付いてわ、全たく別の原理がある。

物理とその作用以外に、生命またわ心理の原因となるものを假定するを二元論と言う。この二元論が事實に於て正しくわあるまいか。それとも、物質と其の作用以外に、生命と心理の原因となるものわなく、唯物一元論が事實に於て正しいであるおか。我等わ生命と心理の原因となるものを認めて精神體と呼んだ。精神體を認める我等の認識わ二元論であるおか。否な、眞に正しい唯物一元論の徹底したものが、我等の認識である。

精神體わ物であるが故に、光の波にも、電氣の波にも、音響の波にも、精神體わ共鳴して、それ自

身また動搖する。共鳴して動搖するわ物一般の性質であり、精神體も物として、この一般性質を持つが、そのほかに他の物に見えない唯一の特色を精神體を持つ。それわ、物の波に共鳴して動搖するおり、感ずる心理の作用を起すことである。この一つの特色のみが、あらゆる存在の他の物から精神體を區別さす。生命の調節作用とゆうも、睿智の意識作用とゆうも、感ずる心理の特色なのだ。

物にわ多種類があり、作用にわ多様の方向がある。それでも存在わ、ただ物と其の作用でしかない。かく考察するを唯物一元論とゆう。我等わ生命と意識の起因として精神體を認めるが、精神體もまた物であり、生命と意識わその作用であるから、精神體を物質の一種として承認するわ、眞に一元唯物論を徹底さすことである。

理學者わ唯物論を唱えながらも時々迷う。宇宙物理學者として權威あるジーンズ氏も、「知識の流れわ非機械的眞理を目指している事に就いて、一般に一致している。宇宙わ大なる機械たるよりも、更らに大なる思索であるよおに見え初めている。精神わもはや、物質王國の闖入者でわないよおに見える。吾々わそれを寧ろ物質界の創造者とし支配者として認めるべきだと考え初めている。茲に於ける精神わ勿論吾々個々の精神でわなく、吾々の個々の精神を育てた原子が、思惟された物として、その中に存在すると考えられる『精神』を意味する。」(「新物理學の宇宙像」一八七頁) 彼れわ神とでも名づけねばならぬほどの偉大な存在があることを時々思ふらしい。しかし、彼れ自身も引用する如く、ニュートンわ「自然物の原因としてわ、現象を正當に説明し、且つ説明するに十分である原因以上のものを容認してわならぬ」と言うている。またウイリアム・オブ・オッカムわ「層判明に、必要に迫られなければ、如何なる物でも其の存在を假定してわならない」と教えたを、彼れわ指摘してゐる。我れ我れに個々の精神體が存在することわ、生命と心理の現象を正當に説明し、且つ説明するに十分であり、また必要に迫られた存在の假定でもあるが、それ以上に創造者や支配者を假定するなら、現象を正當に説明するにわ、

餘りにも多く必要を超え過ぎている。

人間以上に偉大な意識者が存在するかも知れない。しかし、その存在に付き、必要にして且つ十分な理由が提出されねば、我等はその存在を假定することも容認することもできない。これ科學者が常に固守せねばならぬ原則の當然な適用である。だから我等が人間以上の偉大な意識者に付いて何事も知らないと言ふはかない。この答えは、かゝるものゝ存在が、我等の意識に上り得ないを意味する。即ち我等が斯かるものゝ存在を肯定し、また否定することができず、斯かるものゝ存在を全たく意識から抹消せねばならぬ意味である。過去に於ては、かゝるものゝ存在が假定されたが、嚴重な科學者の態度として、かゝるものゝ假定を斷然と拭き捨てられねばならなくなつた。歸納法論理の輝やかしい提唱者スチュアート・ミルは言う。「世界は唯一の存在に支配され、その性質は無限で、その何者かわからず、また世界を支配する原理の何にであるかも知れないが、我等の最高人間の道徳は、この原理を認めることが出来ない」と知り得るのみと言ふならば、その言に服して自己の運命を忍ぶ。しかしその存在を信じ、かつ最高道徳を表わす名稱で、その存在を呼べと言われれば、自分わ之を欲しなると答える。斯かる存在者が何程の力を持つとも、その崇拜を自分に強制し得ない。斯かる存在者が、自分が彼れを善と稱せぬことを理由に、自分を地獄に下すと宣告すれば、自分わ地獄へ行か決心である。」

神が存在するかも知れない。よし神が存在しても、その神が決して自由な意思に依つて、ノアの時代に洪水を起し、ロトの時代に火を降らした感情の存在でなくて、數學的に正確な法則に従う宇宙を統制する物理の實在でなければならぬ。もし神があるならば、今日の宇宙物理學も斯くも決定したのである。けれども、そんな假定を今日の宇宙物理學は、必要にして且つ十分な法則として示さない。なるほど、宇宙の大きな構造は不明である。しかし不明の故に神を假定するは、結論を急ぐ安價な慰安の隱遁でしかない。

宇宙の大きな構造は不明であるけれども、その實質が物と力であることわ確定した。そして力わ物の性質であり、物の起因體なしに力だけが存在するのでないことも判明した。もし物以外に力だけが獨立して別に存在すると言ふなら、それわ一元論でなくて二元論となる。そのときまた、力わ物でない別の存在であるから、唯物論でもないことになる。だから唯物一元論が徹底して完成されるに、まづ各種の力が悉ごとく物の作用であるを確定し、續いて物に種類がある如く、力にもまた種類があり、物の種類に應じて、それぞれの種類の力が作用し出されるを確定せねばならぬ。それに依つて唯物一元論が始めて完成されるのである。

力の中に、熱があり、光があり、電氣があり、音響があるが、また此等とわ全たく種類を異にした、生命の調節作用に始まる心理の精神諸作用がある。こおしたことわ理屈でなく事實であり、この事實から我等が精神體の存在を認識して、著るしく種類を異にする心理の精神作用、著るしく種類を異にする精神體の特殊物質から起因するものであるを斷定する。この斷定により、始めて唯物一元論が完成された。だから精神體の認定を斷じて二元論でなく、眞に一元の唯物論を徹底さすものである。之に反し精神體を否認すれば、物質としてわ持ち得ない心理の諸作用を肉體から起因さすこととなり、追究すると、それわ物のほかに力の獨自な存在を容認する超物質の二元論となる。唯物一元論が正しいが故に、精神體を假定して斯く言うのでわない。各種の自然科學を廣く総合すると、どおしても精神體の存在が事實であるから、必要に迫られて斯く言うのである。

近代思想の根本に於て不思議な奇蹟を否認し、理學一般の普遍法則に於て、宇宙と人生の悉ごとくを理解せんとする。淺い常識唯物論者が精神體を承認するを不思議と言ふなら、物理の一般法則から起り得ない意識の複雜作用を、肉體生理の作用に押し込める彼等の強辯こそ、最も不思議で不可能な奇蹟の迷信である。そんなことわ斷然とあり得ない。思えば肉體のほかに精神體を容認して、生理の諸作用わ肉體から起るが、心理の諸作

用わ精神體から起こると理解するわ、少しも無理のない自然の普遍法則に従がうのである。

精神體を承認すると言へば、古の靈魂説に歸すると恐れるかも知れないが、古の人が言う靈魂わ非物質であり、物の起因體を離れて、ただ不思議な力の靈魂が、フラリフラリ拵ぐと考へた。我等わ非物質の靈魂を決して空想せず、實質の精神體があつて、心理の精神作用を起こすのだと、いとも判明に指示するのである。だから我等わ誤解を避けて靈魂と言わず、心理の精神作用を起こす實體を肉體に比らべて、精神體と名づけるのである。我等わ漠然とした靈魂説に代わるに、判然とした精神體の實在を、必要にして且つ十分な學理からの起因體として追究し、その作用と生理と構造と完成を、最も正確に檢出せんとする。これを人間理學であり、人間理學が精神體を承認することによつて、客觀から主觀に移る激變、波動から感覺が起る激變、生體と死體の不思議な區別、凡べて此の種の疑問が悉ごとく明瞭に答えられ、唯物一元論に疑惑のない信念が徹底して了解される。

終

昭和十一年七月十日印刷  
同年七月十五日發行  
定價 金參拾錢

著者 岡本利吉  
發行者 岡本利吉  
印刷所 東京市世田谷區北澤五丁目七一〇番地  
印刷人 東京市世田谷區北澤五丁目七一〇番地  
使 命 社  
上 村 祐 造

發行所 美愛鄉純眞社  
神奈川縣都筑郡新治村新井新田四九八番地  
振替東京四八九〇〇番